

されば又、樽垣衛門太はその日、世和田、栗太夫らに引き別れ、播磨の守護職、加古の郡領重門の屋敷に到って、摩耶山の辺にて六七人の女山立ち(山賊)らに謀られ、三世姫を奪い取られし事の由を告げ知らせ、これより更に東を指して、夜を日に継いで急ぎしかば、およそ十日余りにして鎌倉に着くとそのまま執権北条相模の介義時の屋敷に赴いて、予て世和田、栗太夫らと示し合せたる如く、偽って申す様、

「さて此の度、それがしらは主君信種の仰せに従い、今参り(新参)の女武者青柳と相供に、奥付きの雑掌 渋川栗太夫、老女宇野江の相役なる世和田の局らすべて四人で、下部六七人を従えて、密かに三世姫を守護し奉り、且つ、天国の宝剑を携えて、当所を指して急ぐ程に、摂津の国の摩耶山の辺にて、斯様斯様の事により、三世姫をも宝剑をも数多の女山立ち(山賊)らに奪い盗られ候いき。察する所、彼の青柳は悪心今に改めず、始めは流人で候いしを十時御前が哀れみたまいて、幾程も無く取り立てたまい、女武者の教え頭になされたるのみならず、武芸に長けし者なればとて、此の度、三世姫を送り参らす警護頭に仰せつけられ、それがしなどは申すに及ばず、世和田、栗太夫の重役なるも皆、信種の御下知にて青柳の手に付けられし。かかる御恩を仇にて返す、青柳はいつの間にもやら山立ち(山賊)女七人と示し合わせて、我々に痺れ薬を入れた酒を飲ませて気を失わせ、あくまで謀りし事なれば、青柳さえも逐電して行方は絶えて知れ候わず。暑さに耐えぬ折なれば、喉の渇きに油断して、鈍く(愚かに)※も謀られ候いし。それがしらととも身の咎の逃れ難きを知ると云えども、自害などせば不忠の上の不忠ならんと思ひ返しつ、栗太夫、世和田と談合仕り、それがしは引き別れて、彼の山路より東へ赴き、かく御注進仕るは身の咎思わぬ私の計らいにて候えども、皆々筑紫へ立ち帰り、更に又、彼の地より御注進に及ばれば、日数遅れて御詮索に不便ならんと思ふばかりに、夜も日も分かず、道を急いで馳せ参り候いぬ。哀れ上無き御勢いに、彼の七人の山立ち(山賊)女を絡め捕らせたまわれれば、こと分明に候わん」と真しやかに述べにけり。

※鈍い(おぞい)：頭の働きがにぶい。気が利かない。愚かだ。

此の時、鎌倉にては執権北条義時の所労(病氣)※ようやく平癒に赴き、自ら民の訴えを聞き定める折なりければ、今、樽垣衛門太の愁訴※の趣に驚いて、やがて呼び入れ対面しつつ、なお又、事の始め終わりを詳らかに問い定め、

「我亡き父の危急を継いでより、世の中久しく太平なれども先亡の余類あちこちの山林に隠れ住み、民の憂いをなす由聞こゆ。さればにや、去年の秋、太宰府より送り参らす貢の金三千両を道にて奪い盗られしも、今に至って盗賊知れず。此の度もし詮索をゆるかせにして差し置かば、遂に由々しき大事とならん。真に不慮の事なり」とて、憤ること大方ならず。まず衛門太を留め置いて、評定衆に由を告げ、しきりに評議を凝らす折から、太宰府より早や打ちの使者、早道葉四郎と云う者、鎌倉へ到着して信種の呈書を奉り、且つ、摩耶山の辺にて、三世姫と宝剑を奪い盗りたりと云う山立ち(山賊)女らの体たらく、並びに女武者青柳の事の趣、全て栗太夫、世和田らが訴え申せし一部始終は斯様斯様と述べる事、先に樽垣衛門太の口上に符合せしかば、義時しきりに頷い

て、

「かかれば事皆疑うべからず。いでや諸国へ下知を伝えて、日ならずその曲者らを残らず絡め捕らせんぞ」とて、衛門太、葉四郎らに義時の返簡をもたらし、やがて太宰府へ返し遣わし、俄かに畿内へ触れ知らせて、盗賊追捕の下知を伝え、なかんづく播磨の郡領重門へはいとも厳しく命ぜらる。摩耶山は重門の領分たるによってなり。

されば樽垣衛門太は思いのままに事整って、世和田、栗太夫諸共に咎を逃れるのみならず、鎌倉の首尾良かりしかば、心密かに喜びつつ、葉四郎とうち連れだつて、筑紫を指してぞ急ぎける。

※所勞(しろう): 疲れ。病氣。 ※愁訴: つらい事情を明かして嘆き訴えること。

さてもその後、青嵐の青柳は栗太夫、世和田らが物妬みの心より、我云う由に従わねば、摩耶山の辺にて七人の山立ち(山賊)女に三世姫をも宝剣をもおち無く奪い盗られし時、自害せばやと思ひしかども、たちまちに思い返しつつ、毒酒の毒がまだ醒めざりし人々を罵り捨てて、独り逐電したれども、指して行方を定めねば、足に任せて終夜ひたすらに走る程に、その次の日に河内の金剛山に程遠からぬ北山村の辺に來にけり。

此の時ひどく飢え疲れて、又、行くべくもあらざりしに、と見れば此の村外れに立場、茶屋とおぼしくて、強飯、煮染めを売る店あり。これ究竟と走り入り、床机に腰を打ち掛ければ、この店の小者なるべし、十五六の田舎人が忙わしく見返つて、「御家様(御婦人)※何を召されるぞ」と問わせもあえず、

「然ればとよ、私は飢えて物欲しきに、さあ強飯をもて來よかし」と云うに小者は心得て、はげ黒みたる芳野五器※の茶碗にうず高く盛つたる煮染めを添えてすすめるを青柳は値も問わず忙わしく箸を取り、あくまで腹に満ちしかば、再び小者に打ち向かつて、

「私は路用を失つて、持ち合せたる銭は無し。重ねてここを過ぎる時、利息を加えて償うべし。しばらく待ちね」と云いかけて、身を起こす時、仕込み杖を右手に取りつつ走り出れば、小者は驚き怒つて、「ヤレ食い逃げよ」と呼び張るにぞ。此の家の女房▼なるべし、二十四五の大女が「ソレ、逃がすな」と叫ぶ程に、主人と見えたる一人の男は棒おっ取つて追っかければ、又、女房も手頃な棒を脇挟みつつ、遅れじとて後に続いて追つたりける。

※御家様(おえさま): 上方で、中流以上の商家の主婦を敬つていう語。

※五器(ごき): 食物を盛るためのふたつきの器。木製、陶製、金属製などがある。

さる程に青柳は行くこと未だ幾ばくならず、たちまち後辺に人ありて、「盗人女め、逃がしはせじ」と罵り叫んで近づいたり。青柳これを見返つて、心の内に嘲笑い、立ち止まりつつ待つ程に、既に近づく此方の主従、

「面に似合ぬ食い逃げ女。一膳飯で未だ足らずば棒をや食わせん」と罵る声とともに進んで、ひらめかして打たんとしたる二人の片棒を青柳すかさずやり違わして、握り留めて、エイと引いたる手練の早技、左右等しくひよろひよろと、ひよろつく弱腰したたかに打たれて小者も主人の男も「あなや」と一声叫びもあえず、身をひるがえして倒れたる。程もあらせず、以前の女房が遅ればせに追っかけ来て、この有様にいよいよ怒つて、持つたる棒を取り延べて、打ち倒さんとおめいて(叫んで)かかるを青柳騒ぐ気色無く、一つの棒を投げ捨てて、右手に残せし一筋の棒にて丁と受け止めて、

いとも激しく戦う手練に怯む此方の女房は慌てふためき構えの外へ走り退きつつ、声を掛け、
「ヤヨ待ちたまえ、云うことあり。思うにましたる御身の手の内。察するところ世の常なる女子にてはあるべからず。名乗りたまえ」と叫ぶにぞ、青柳にっここと微笑んで、
「今は何をか包むべき。元は都の者なれども太宰府に流されたる青柳と云う者にこそ」と名乗るに驚く此方の女房、

「しからは先に都にて、大莫連牛鬼婆を只一討ちに殺したまいし、彼の青嵐の青柳殿か」と再び問えば青柳は頷いて、「真に問われる青嵐の青柳はこれ私なり」と云うにますます驚く女房は棒投げ捨てて膝まずき、

「私は眼ありながら、さる勇婦人を見知らずして、ひどく無礼をしはべりぬ。私も元は都の者、物心を知る頃よりして、女の業にはいと疎く、只武芸をのみ好みしかば、伝を求めて都の女武者所の教え頭。今もその名は隠れ無き、虎尾の桜戸殿を師と頼み、その太刀筋を習いはべりき。しかるにその桜戸殿は彼の亀菊に憎まれて、無実の罪に落とし入れられ、佐渡の国へ流されたまいき。その頃、私は近江の親類に招かれて、久しくそこにはべりしに、彼の亀菊はなお飽かず、桜戸に縁ある者とし云えば、絡め捕らせて牢屋に繋ぐと聞こえしかば、私も都に程遠からぬ近江路にすら留まり難く、慌てふためき迷い出てこの所まで来るなり。

しかるにそこにはべる男は私が為には従兄弟にて、名を赤八と呼ばれたり。この麓路にて飲み食いの商いして世を渡れどもまだ女房の無かりしかば、仲人入らずに談合しかけて、私を妻にする者から、当国には山賊多く、ややもすれば店へ来て、飲み食らいして値を取らせぬ溢れ者も少なからず、さるを私がここへ来て、店に座りし始めより、溢れ者らをひどく懲らして、損することの無くなりしはいささか習い覚えたる武芸の徳ぞと人も誉め、赤八もしか思えば、且つ喜び且つ恥じて、私に所帯を打ち任し、その身は結局（結局）へりくだり、後見に成りはべりしより、店は日に増し商い多かり。ここをもて、そこにはべる手間介と云う只一人の小者さえ召し使って、ともかくもして世を渡れば、里人ら、私を称えて、山盛屋のお剛と呼べり。

さて御身は太宰府にて御見出しに預かりたまいて、女武者の教え頭になりたまいと、或る人の噂に近頃聞きつるに、何らの故にここらまで、さ迷い歩きたまうぞ」と問われて青柳は頷いて、「私の身の上には様々の物語りがはべれども一朝には尽くし難し」と云うにお剛も頷いて、「しからは宿所へ伴いはべらん。いざたまえ」と云う程に、赤八と手間介はようやくに身を起こして、二人の物語りを聞きつつ驚き、且つ恐れて、諸共に額を突き、
「我々凡夫の悲しさは僅かの銭を取らんとて、さるたくましき女中と知らず、毛を吹いて瑕を求めたる、後悔ここに絶ち難し。定めてお腹は立ちたらんが、知らずに犯せし咎なれば、海なす心に許させたまえ。さらば案内をつかまつらん」と云いつつ、ひとしく先に立って、やがて宿所へ伴いけり。

○かくてお剛は青柳を奥座敷に伴って、酒を温め肴を調べ、赤八▼諸共に様々なるもてなし大方ならざれば、青柳は深く喜んで、さて都にて在りし事、又、太宰府にての事の趣、此の度三世姫を送りの為、探題信種の下知に従い、世和田、栗太夫らと共に鎌倉へ赴く道中に摩耶山の辺にて七人

の女山立ち(山賊)らに謀られ、三世姫を奪い取られし、その事の始め終り、且つ、栗太夫、世和田
らが我が云う事を聞かずして、彼の災いに会い、既に覚悟を極めて、自害せんとしつれども思い返
す事あって、逃れてここまで来る事の一部始終を説き示せば、お剛は更なり、赤八も只、青柳の不
仕合せを慰めかねて、諸共に嘆息の他無かりけり。

かくてその日も暮れしかば、青柳は思い掛け無く、ここに一夜を明かしつつ、その明けの朝、お剛
らに暇乞いして、いでんとするをお剛は聞かず押し止め、

「此はいづちへ行きたまうぞ。願わくば、私の宿所にいつまでも逗留したまえ。させるもてなし
あらずとも朝夕安く送らせはべらん。まげて此方に留まりたまえ」といと懇ろに留めれども、青柳
は聞かず頭を打ち振り、

「御志は嬉しけれども私は此上無き罪人なるに、御身夫婦を巻き添いすれば、後悔そこに絶ち難し。
只、再会の日を待たんのみ」と云うにお剛は留めかね、

「しからはいづこを心当てに赴きたまう事やらん」と再び問えば、頭を傾け、

「先に赦免に合いし折、都へ帰る道すがら、賤ヶ岳の辺にて斯様斯様の事により、御身の師匠桜戸
殿としばらく挑み戦いにき。その時、その砦の頭領の賽博士巨論が私を砦に留めんとて、云わ
れし事の有りしかど、その折は思う由あれば遂に都へ赴きにき。この時初めて桜戸殿と面を合わ
せる事を得て、武芸の程もよく知りぬ。かかれば、今更おめおめと賊の砦へ赴いて、頼まんこと
も面伏(不名誉)※なり。なお又、他所にいささかの心当てもあるなれば」と云うをお剛は聞きながら、
「遠く縁を求める事は道中もなお心許なし。御身の為に究竟なる隠れ家のはべるかし。この所よ
り程近き金剛山には昔より尼寺がはべりしに、近頃、鉄壺眼白蛇と云う悪たれ婆が彼の尼寺に同宿
せしが、万夫不当の力量あり。武芸も世の常ならざれば、只何時となく手下を集めて、尼法師らを
追い出して、その寺を砦としつつ、追い剥ぎ(ひはぎ)を事とする程に、兵糧財宝云えば更なり、四
五百人の手下ありと風聞隠れなきものなり。頼みたまえば必ず留めん。この儀に従いたまえかし」
と云うを青柳は聞きながら、

「露の命をいと惜しみ、山立ち(山賊)婆の群れに入らんは願わしからぬ業なれども御身の意見も黙止
(無視)難し※。まず試みに行って見ん」と云うにお剛は喜んで、朝飯をすすめしかば、青柳はお剛ら
に喜びを述べ、暇乞いして金剛山を指して行く程に、と見れば、向かいの森の内に色黒く形大きく
肥えふくだみ(膨らみ)たる行脚の尼が株を枕にうたた寝したるが、たちまちに目を覚ましけん。間
近く来る青柳を見るより早く身を起こし、枕に立てたる鉄の棒をおっ取って、声高く昼寝の隙をう
かがって、

「物盗りに来る昼鷲め。目に物見せん」と罵って、棒ひらめかして打たんとす。青柳も又、大きに
怒って、

「ほざいたり、野伏せり尼めが。汝こそ▼里遠きここの陰に網を張り、旅人を追い落とす、大盗人
にてあらんずらん。覚悟をせよ」と息巻き猛く進み向かえば、行脚の尼が早や打ち掛ける鉄撮棒を
仕込み杖にて受け流し、抜き合わせつつ、丁々発止と互いの手練、秘術を尽くせば、青龍雲間に戦
う時、急雨しきりに降る如く、猛虎山林に挑む時、谷風俄かに起こるに似て、勝負は果てしも無か
りしかば、青柳は忙わしく棒受け止めて、

「やよ、待てしばし。侮り難き御事の武芸。察する所、世の常なる行脚の尼にはあるべからず。さ

あさあ名乗れ、いかにぞや」と問うに答えず行脚の尼は眼を怒らし声振り立てて、「今更名乗って何にせん。早く勝負を決せよ」と、又、打ちかかる棒の手を受け止めつつ、にっことうち笑み、

「我は御事の恐ろしさに謀り打たんとするものならんや。我は由ある京人、青嵐の青柳とて、采女の数にも入りたる者なり。元より恨みも無き御事と鎬を削って、いずれまれ、あたら命を失えば、いと愚かなる業ならずや」と云われて尼は頷いて、

「世の風聞に予ねて聞く。御事は先に都にて牛鬼婆を斬り伏せて、所の害を除くものから、その折、筑紫へ流されし、彼の青嵐の青柳か」と問い返されて、

「云うにや及ぶ、私こそ、その青柳なれ。又、御事の法名は」と再び問われて、行脚の尼はからからと笑いつつ、

「その名は予ねて聞き知ったる青柳殿とは思ひもかけず、ここにて会しは不思議の縁。思えば危なき事なりき。私は先に甲斐の国にて、なまよみ屋の後家貝那を一拳に打ち殺して逐電しつつ、尼になりたる花殻の達。法名を妙達と呼ばれたる生臭比丘尼ではべるかし」と名乗れば、青柳は微笑んで、

「さては浮世に隠れ無き花殻の尼御前なるに近き頃まで深草の成仏寺に在りと聞こえしに、そも又、いかなる故あって、ここらを徘徊したまうやらん」と問えば妙達は

「然ればとよ。過ぎつる年、彼の亀菊に憎まれて、佐渡の国へ流される桜戸の路次(道中)の事、いよいよ心許なければ見え隠れに付けて行きしに、果たして道送りの走使い蜘蛛平、土九郎が示し合わせて、遂に道にて桜戸を殺さんとせし折に我儕がたちまち現れ出でて、桜戸を救いつつ、蜘蛛平、土九郎らをひどく懲らして、つつが無きことを得たり。かくて又、越後の寺泊まで見送って、桜戸らに別れつつ、我儕は深草へ帰りしに、その土九郎、蜘蛛平に我が名を名乗り知らさねども、似非賢くも推しけん。彼らは都へ立ち帰り、桜戸を得殺さざりし事の訳を斯様斯様と我儕の事を訴えたり。これにより亀菊は我儕を憎み、憤り、成仏寺へ下知しつつ、我儕を寺に置く事を許さず、あまつさえ数多の捕り手の兵をもて、矢庭に絡め捕らせんとて早や打ち向かうと聞こえしかば、我儕は寺を逐電して、再び旅寝に月日を送って、此の河内路に来て聞くに、近頃より金剛山には鉄壺眼白蛇と云う山立ち(山賊)の大將軍あり。

女なれども武芸に長けて、且つ力量も万夫の勇あり。数多の手下を集めたりと風聞隠れ無きにより、群れに入らんとしつ、今朝しも彼処へ赴きしに、白蛇は我儕を疑い、留める気色が無きのみならず、只一腕の酒だも飲ませず、我儕も腹の立つままに思いのままに罵りしを彼女の手下の山賊らが理無く我儕を押し出して、山門を閉ざしたり。打ち破って入らん事は難くもあらぬ業なれども、彼女は大敵我儕は一人。且つ、昨夜より物を食わねば、飢えたる事も大方ならず、まず退いて思案をせめと思ひ返しつ、ここまで来て、しばらく憩い居つるなり」と一部始終を物語れば、青柳も又、その身の上の始めより終りまで、斯様斯様と説き示し、又、山盛屋のお剛の事、しかじかなりと告げ知らせて云う様、

「聞くが如く白蛇は人を損なう山賊なり。討ち滅ぼすべき者なれども彼女は数多の手下あり。謀り事を用いずして、血気に逸らば過ちあらん。まず山盛屋へ赴いて、談合するに増すことあらじ。▼いざたまえ」とて先に立てば、妙達はこの儀に従い、青柳と諸共に山盛屋へぞ赴きける。

※面伏せ(おもぶせ): 恥ずかしくて顔を伏せるほどであること。不名誉。

※黙し難い(もだしがたい): だまって見ていられない。黙過できない。

○されば又、青柳は山盛屋へ立ち帰り、妙達の事、白蛇の事さえもお剛らに解き示せば、お剛は驚き且つ喜んで、妙達と青柳を奥座敷へ迎え入れ、更に又、酒食をすすめて、赤八ら諸共に様々にもてなしつつ、白蛇を討ち取るべき謀り事を談合するに、お剛はしばらく思案して、

「彼女は手下が多かるに、苦肉の謀り事をもてせずば勝ちを取る事難かるべし。我儕に一つの謀り事あり。花殻殿を縛めて金剛山へ引き持て行き、斯様斯様に謀らえば、容易く彼奴を欺くべし。その謀り事はしかじかなり」と手に取る如く囁き示めせば、妙達、青柳は聞きながら、「此の謀り事、妙なり」としきりに誉めて感じて止まず、「さらば今より打ち立たん」とて、大きな縄をもて、仮に妙達を痛く縛め、お剛は妙達の鉄撮棒を引かたげ、山刀を腰に横たえ、青柳は仕込み杖、赤八と手間介は竹槍を携え、又、里人の力有って腕立てを好む若者を十人ばかり語らって、謀り事を説き示し、皆連れだつて妙達を引きつつ金剛山へ赴けば、山門を守る山賊ら進みいで押し止めて、「そは何者ぞ」と咄めたり、その時お剛は先に立って、

「これは麓の北山村にて、強飯、煮染めなどを売って、世を渡りはべる山盛屋のお剛、赤八らにて候なり。しかるに今日この大比丘尼が私の店に尻を掛け、あくまで飲み食らいして一文も値を取らせず、あまつさえ金剛山の御前様にしかじかの恨みあれば、搦め手(裏門)より火を放ち焼き討ちにせんなどと罵り狂って手に負えず、よって宥めて酒すすめ、酔い伏したるをうかがって、大勢矢庭に折り重なって、かく生け捕って候なり。さればこの大比丘尼は御前様に仇なす者なり。引きもて参つて由を訴え、いかで御覧に預からばやとて、里人ら諸共に推参したるにて候」と真しやかに告げしかば、山賊らは聞きながら誉めること大方ならず。此の由を告げ申さんとて、一両人は奥に至り、しかじかと訴えれば、白蛇は聞いて大きに喜び、「その者共を呼び入れよ」とて、自ら本堂に立ち出でて、高座の褥につく程に、宗徒の山賊四五十人、左右二側に居流れたり。その時、お剛らは以前の山賊に導きせられて、高座の辺に至りしかば、白蛇自ら子細を問うに、お剛らは先の如く斯様斯様と訴えるを白蛇聞いて思わずも小膝を叩いて打ち笑い、

「その比丘尼めは先の程この山へ来て宿を乞いしを彼奴の望みに任せぬとて、怒り狂いしのみならず、拳をもって我が小鬘を割れるばかりに張り▼曲げたり。病気の無き我が身なりしに、頭痛八百の相場を狂わせ、且つ、曲ろく(法事椅子)を踏み壊して、巻貫余りの損をいたさせ、無礼緩怠(なおざり)、言語道断、許し難き奴なれども尼法師の事なれば命を助けて追いいだせしに、さる恩を思わずして、なお仇せんとほざく事、誰が憎しと思わざるべき。今我が手づから斬り苛んで、弄り殺しにしてくれん。さあさあ此方へ押し据えよ」と云うにお剛は心得て、青柳ら諸共に妙達を高座の辺へ押し据える様にして、たちまち縄を引き解けば、妙達早く身を起こし、お剛らが持て来たる鉄の棒をかい取って、眼を怒らし声を振り立て、

「死に損ないの盗人婆め、飽く事知らず、物を惜しみ。あくまで我につらかりし報いはてき面、天の責。観念しろ」と罵って、棒ひらめかして打ってかかれば、白蛇ひどく驚いて、高座の上より転び落ち、逃げんとするを逃がしもやらず。大喝一声、妙達の比丘尼甲斐ある拜み打ち、白蛇あっと叫びもあえず、頭を微塵に碎かれて、脳みそ出でて死んでけり。

左右に並居し宗徒の山賊はこの体たらくに驚き騒いで、皆々刀を抜きそばめ押し隔てんとする程に、隙もあらせず青柳、お剛、赤八、手間介、里人らまで、得物得物(武器)を打ち振って、遮り止めて働かせず。なかんづく青柳の太刀先に当たる者は或いは頭を討ち落とされ、或いは胴切り唐竹

わ 割り、またたく隙に二三十人が枕を並べて討たれしかば、残るも半死半生にて、深手浅手を負わぬ者無く、よろめきながら逃げ走るを青柳、お剛ら先に進んで、なお逃がさじと追って行く。

されば数百の山賊どもは白蛇が既に討たれし由を聞きつ呆れつ、度を失って戦わんとする擬勢も無く、上を下へと覆したる。愁傷大方ならざりけり。

けいせいすいこでん だいしへん きょくていばきん うたがわくにやす
傾城水滸伝 第四編ノ二 曲亭馬琴著 歌川国安画

白蛇は既に早や妙達に討ち殺されて、残る宗徒の山賊らは又、これ青柳、お剛らに大方ならず討たれしかば、外の方に集いたる手下の大勢驚き騒いで、得物得物を引下げ打ち振り、群だち来たって妙達らをおっ取り込めて打たんと競うを「物々しや」と妙達、青柳、お剛も共に引き受けて、またたく隙に斬り散らせば、どっと崩れて逃げ走るを山の側辺に追い詰めた妙達、青柳は声高やかに「天罰思わぬ盗人ども。今より心を改めて、真の人にならんとならば我は汝らの命を助けん。いかにいかに」と呼び張るにぞ、皆々刃を投げ捨て、大地にひれ伏し頭を揃え、「我々心愚かにて、賭けと酒とに家を失い、身の置き所無きをもて、鉄壺眼の手下となりぬ。命を助けたまわれれば、いかで仰せに背くべき。心を改め候わん」と侘びつつ降参してければ、これらを許して下部とし、妙達と青柳はこの古寺の主となって、山立ち(山賊)の業をせず、焚き木を切らせ、炭を焼かせ、或いは薬草を採らせなどして、里へ出して銀代えさせ、数多の人を養うに物乏しくもあらざりけり。

これ 是より先にお剛、赤八らは妙達、青柳に別れを告げて、手間介、里人ら諸共に各々の家路に帰りしが、白蛇が減んでより里に盗賊の憂い無くなりしは皆これ妙達、青柳の▼武勇の徳によるものなりとて、遠近の百姓どもが出来秋毎の初穂は更なり、麦、豆、野菜に至るまで、各々金剛山へ持て行って、妙達、青柳に贈りしかば、兵糧にすら乏しからず、ここも一箇の砦となって、妙達と青柳は数多の手下に敬われ、豊かな月日を送りけり。

されば又、鎌倉の執権北条義時は国々へ下知しつつ、「彼の摩耶山の辺にて、三世姫と宝剣を奪い盗って立ち去った七人の曲者ら並びに青嵐の青柳を詮索嚴重なるものから、なかんづく重門の領分はその根本たるどころなり。追捕なおざりに月日を過ごせば、領主の落ち度たるべし」と、いとも厳しく触れられたり。

さらでも播磨の郡領は先に信種の家の子(家臣)樽垣衛門太の訴えにより大きに驚き、彼の七人の女強請(ゆすり)※らをしきりに詮索すると云えども絶えて便りを得ざりしに、鎌倉より御教書が到来して、執権の下知嚴重なれば、心の内に恐れ悶え、家臣らをうち集えて日毎の評議まちまちなり。その中に屋久手虎右衛門と云う家の子(家臣)は市の司を承りて、所の悪者、盗賊などを絡め捕るを役義とすれば、予ねて主命に従って、数多の組子を引き具しつつ、日々に巷を徘徊しつつ、詮索なおざりならねども、未だ便りを得ざりしに、太宰府より信種の書状が到来して、「鎌倉より御沙汰あり。彼の曲者らはいかにぞや。早く手立てを巡らして、召し取って参らせたま

え。さらずば身の上なるべし」と巨細(詳しく)に下知を伝えれば、郡領重門いよいよ悶えて、屋久手虎右衛門を召し上し、彼の曲者を詮索の事、厳しく申し付け置きしに、今に至って捕らえ得ず、見よ太宰府より内書あって斯様に伝えられたるなり。この事なおも功無くば、我家は遂に断絶せんか。これもまた計り難し。畢竟(つまり)※役義を疎かにしつる汝の不忠によるものなれば、今日よりして十日の内に尋ね出さぬものならば、すなわち汝の頭を刎ねて、鎌倉へ参らせん。ゆるかせならぬ後日の証拠はまずこの通り」と息巻き猛く身を起こし、脇差しの刀を抜いて、虎右衛門の髻をふっと切り取りつ、

「命惜しくば髻の毛の一部とも伸びぬ間に、彼の曲者らを絡めていませ。十日過ぎてもその儀が無くば、汝の頭を刎ん事、只この髻の如くなるべし。心得たるか」と厳しき主命に返す言葉も無かりけり。

○されば屋久手虎右衛門は心の憂いやる方も無く、更に夢路を辿るが如く、うつうつとして宿所に帰れば、女房のお井戸が出迎えて、夫の髻が無くなりしを見つつ驚き怪しんで、まずその故を尋ねれば、虎右衛門は主命のありつる由を物語り、

「かかれば今より十日経ても彼の曲者らの在りか知れずば、我一命は保ち難し。いかにすべき」と詫しげに、託て(嘆け)ばお井戸も胸潰れ、慰めかねつつ諸共に拭う涙の露の身に、露の命の危うさをいかにせましとばかりに、夫婦は額を合わせつつ談合果てしなき折、唐戸の方より来る者あり。

これはこれ、虎右衛門の妻お井戸の只一人の弟、岡田の引蔵と呼ばれる極めて烏滸(馬鹿な)の悪者にて、酒を嗜み、賭けを好んで、ややもすれば姉婿に負い目の尻を拭わせる縁者倒しの似非者なれどもさすがに妻の弟なれば虎右衛門も止む事を得ず、渋りながらもその折々にちとの金を使わして厳しく意見しつるものながら、例えの節の糠に釘※、よく利くべうは見えざりき。

さる程に引蔵は出る度毎にうち負けて、好める酒も飲む由無ければ、今日は姉御をいたぶって、ちとの元手にせばやとて、又、懲りずに来るなり。

※糠に釘：手応えの無いこと。

その時お井戸は思う様、

「……あの引蔵が用あり氣に来るは損の行く筋にて、碌な事とは思われねども、かかる時には膝とも談合※、さすがに親身の事なれば力になる由無からずや」と思案をしつつ出迎えて、常には在らず愛想良く、俄かに酒を温めて、在り合わせたる肴を取り添え、自ら酌に立つまでに大方ならずもてなせば、引蔵は猪口を引き受け、まず二三杯あおりつけ、

「兄貴も酒は好きなるに奥に御座らばここへ出て、などで一杯飲みたまわぬぞ」と問われてお井戸は

「然ればとよ。虎右衛門殿はひどく氣の揉めたまう事あれば、納戸に籠もりて居たまうかし」と云うに引蔵は眼を見張り、

「兄貴は物に不足無き結構なる役柄にて、銭金の掴み取り、いつも正月なるべきに、氣の揉めるとは何事ぞ」と問い返されて小膝を進め、

「そなたは未だ知らでやあらん。去ぬる頃、摩耶山の辺にて鎌倉へ下し参らせる三世姫と天国の

宝剣を奪い取ったる曲者は七人の女ぞとよ。その体たらくは斯様斯様」と聞きつるままに▼物語り、
「そを詮索の事により、虎右衛門殿は去ぬる頃より夜の目も合わさず尋ねたまえど、ちとばかりだ
も手掛かり無し。この故に殿様が大方ならず苛立ちたまいて、今日よりして十日の内に彼の曲者を
絡め捕らば、汝の頭を刎ねん事、かくの如くなるべしとて、髻を切り取らせたまいぬ。され
ばとて、今日までも手掛かりとては絶えて無し。この故にこそ我が夫が物思いしたまうもいと道理に
はべらずや」と云いつつ涙を押し拭えば、引蔵はつくづくと聞きつつ、たちまち高やかに、からか
らと打ち笑うをお井戸は恨める気色にて、

「そなたは何が可笑しくて、姉の夫の大役難、命も危うき事の由を面白そうに笑うぞや」と云うを
ば聞かず、

「コレ姉御、その七人の曲者女のその折の成り格好、事の様子を今聞いて、思い合わせる事あれば、
兄貴の命を救わん手立ても俺様の胸にある。その事訳を良く聞きたくば、もちっと馳走をしたまえ
かし。煮置きの肴やひたし物で大事の事を聞こうとはいけあたじけ無い(欲深い)※人達じゃ」と悪
口聞くと耳よりにて、お井戸は納戸に赴きつつ、今、引蔵に云われし由をせわしく夫に告げ知らせ、
さらに又、肴を整え、いと忠実やかにもてなす程に、虎右衛門も納戸より忙わしく出て来て、

「引蔵よ、そなたは彼の七人の曲者の事の様子を知っては居るか。もし手掛かりがあるならば包ま
ず告げよ。いかにぞや」と問えば引蔵は微笑んで、

「兄貴、今、目が覚めましたか。日頃は俺を罵って、能無し者じゃの親類の面汚しじゃのと沢山そ
うに、五両の無心は三度減らして、二両も切りかね一度にゃ渡さず、云う目を出された事は無けれ
ど、苦しい時の神頼み、それほど訳が聞きたくば話すまいものでも無けれども、云うにはちっとま
だ早い、彼の七人の曲者らは此の紙入れにへし込んで、俺のぽっぽへ納めて置いた。此方の十計尽
き果てて、首の座へ直る時、云って救って進ぜよう」と落ち着き顔がもどかしく、▼お井戸は泣き
声振り立てて、

「たった一人の姉の夫の難儀を知りつつ、気を揉ませて、いつまで物を思わせる。彼の曲者を紙入
れへへし込んで置いたとは合点が行かぬ。どう云う訳ぞ、聞かせてたも」と裏問う※隙に、虎右衛門
は納戸へ行って小判四五両を携え来て、

「ナウ引蔵、此はいささかの物ながら、まず当分の酒手にせよ。彼の曲者らを絡め捕り、殿より褒美
をたまわれれば、そなたの事も聞こえ上げ、一廉(相応)※の礼せざらんや。まず早やこれを納めよ」と
云いつつ近く差し寄せるを引蔵は手にも取らずに押し戻し、

「否、置きたまえ、置きたまえ。能無し者の親類倒しと耳だこのいるまでに、日頃云われて懲り果
てた。かばかりの金貰ったら、いつまで恩に掛けるやら。その程も知れかねるに、コリや、まず、
よしにしましょう」と空嘘吹くに立つ腹を横に直して虎右衛門は

「ハテさて引蔵、悪い見、此の金は我が身の上を減らして、そなたにやるには非ず。我は数多の
役得あり、肴代とて貰った物で余計の金の事なるに、いかでか恩と思ふべき。この金をさあ納めて、
彼の曲者らを紙入れにへし込んで置くことその訳つぶさに知らせよ」と夫婦右より左より問いで
うかけて果てしなければ、引蔵は不承不承にその金を受け納め、

「安いものだが、それ程までに口説かれはしよ事がない、さらば語って聞かそうか」と云いつつ、
紙入れの間より、反故(紙屑)一片を取り出して、

「まずよくこれを見たまえかし。我等近頃、仕合せ悪さに兵庫の勝山村に赴きしに、彼処も儲かる

口は無し。折から庄屋の物書きが大病を患らって、代わりの人に事を欠く、四五日行って助けずやと或る人が云うに任して、庄屋の雇い物書きを十日ばかり務める程に、彼の村の掟にて旅籠屋は云うも更なり町人百姓に到るまで、逗留客の在り無しを夜毎に詮索せられつつ、もし在る時は旅人の名も国所も聞き質し、帳面へ留め置く事は諸役のしつる業になん。これにより宵々毎にその村中をうち巡りしに、去ぬる水無月三日四日の頃、勝栗返しの髪八と云う者の宿所に七人の女旅人が逗留したり。その国所を尋ねしに、我々は備中(岡山)者なるが、此の度湯治を思い起こして、摂津の有馬へ赴くなり。名はしかじかと云うに任して、帳面には記したれども、その中に見知り越しなる女あり。彼女はまさしく摂津の国の天王寺村の村長の多力の小蝶なり。彼女等は我等を見知らねども我等は確かに見覚えあり。しかるに真を告げずして備中なる者と云い、さも無き名さえ名乗る事、心得難く思いしかども、当分雇いの我なるに詮索立ては無益にこそと思ひ返して詰りも問わず、かくてその後途中にて、彼の髪八の女房の昼鼠の白粉に会いぬ。その装束は常には似ず、甲掛け▼脚絆に旅草鞋して担い桶を担いだり。何処へ行くぞと尋ねしに、ちと用ありと答えつつ、行き違ふ時、桶の内より酒の香ぷんと香り立つ、且つ髪八の宿所の様子はをさをさ女世帯にて亭主は尻に敷かれる如く、彼の七人の旅女は只白粉とのみ親しき様なり。これかれ思い合わせるに、白粉も謀反の同類にて、彼の七人の旅女は摩耶山にて三世姫と宝剣を騙り捕ったる強請どもに疑い無し。彼の折、名前を記したる帳面を書き損なうて、書き直す時、その一枚を引き裂き取りつ、枕紙にせばやと思つて、紙入れにへし込み置きしを忘れつつ、今日までそのままある故に彼の七人の曲者をば我が紙入れにへし込んで、ぽっぽに納め置きたりと云いし云われは右の如し。早く白粉を絡め捕り、厳しく拷問したまえば、彼の七人の同類は定かに知らるべきものを女々しく物を思いたまはやくは役義に合わず愚かなり。さは思わずや」と誇り顔に顎押し撫でて説き示せば、お井戸の喜び云えば更なり。

※膝とも談合：困った時は自分の膝さえ相談相手になるという意味。相手が誰でも相談はする価値がある。

※裏問う(うらとう)：それとなく相手の心中を探る。本心を問いただす。

※一廉(いつかど・ひとかど)：①ひとときわ優れていること。②それ相応。③一つの事柄。

虎右衛門は枯れたる苗が雨に生きたる心地して、天地を拝み小踊りしつつ喜ぶ事大方ならず、引蔵をば留め置いて、衣装を改め忙わしく城中へ赴きつつ、申し上げるべき事ありとて、主の辺へ参りしかば、重門は近く招き寄せ、

「いかに摩耶山の曲者らを詮索の手掛かり有りや」と問われて虎右衛門は額を突き、

「さん候。それがしの内縁ある岡田の引蔵と申す者が斯様斯様に申す由あり。かかれれば勝山村の百姓髪八、その妻白粉を絡め捕り、一詮索仕らば彼の七人の曲者も定かに知られ候わん」と云うを重門は聞きながら、微笑みつつ頷いて、

「そは究竟の手掛かりなり。汝、今よりうち立って、白粉夫婦を絡め捕れ。逸って捕り逃がしなそ」と、言葉せわしく仰すれば、虎右衛門は承り、宿所へ帰って組子を集め、引蔵に案内させて、その夜亥中の頃おいに勝山村へ赴きつつ、なお又、庄屋何がしに事の手筈を示し合わせ、さて髪八の門辺に集いて、「急用あり」とて呼ばせけり。

この時白粉は暑さにあたって、悪寒発熱甚だしく枕も上らざりしかば、看病しつつ起きていたる髪八は何心無く出て、門の戸を引き開ければ、「捕った」と込み入る組子の勢、驚き恐れる髪八を取って引き据え、ひしひしと早や縛めて動かせず、「女房白粉を逃がすな」とて矢庭に奥へ踏み込

んで、病み伏したりける^{ひるねずみ}昼鼠の襟髪^{えりかみつか}揃んで引き起こし、有無を云わせず繩を掛け、髪八^{かみはち}諸共引きもて帰って、そのまま牢屋に繋ぎ置き、明けの朝、虎右衛門は白粉、髪八を絡め捕ったる▼事の趣をしかじかと主君に聞こえ上げしかば、重門の喜び大方ならず、

「しからはは汝はその者共を厳しく責めて白状させよ。最も大切なる罪人なれば、我も隙見をすべけれ」とて、その日髪八、白粉らを問注所の坪の内へ引いださせて、厳しくこれを責め問えども、始めの程は知らずと陳じて、打ち叩かれても云うこと無ければ、虎右衛門は苛立って、

「汝らいかに陳ずるとも既に訴人の者あって、彼の曲者七人の内に津の国(摂津国)の天王寺村の村長の小蝶も在りと定かに云えり。その余の六人は何者ぞ、有りつるままに申さずば、骨を拉いで云わせんず」と鞭を上げて打たせる事、一百余りに及びしかば、白粉は苦痛に絶えずして、小蝶殿の事を早や知られたれば、今更に包むも甲斐無き事なれと思案をしつつ、声を立て申し上げはべりてん。

「彼の七人の女子の内に多力の小蝶あり。私は小蝶に頼まれて、酒売りに出で立ちつつ、痺れ薬をものせしなり。その余の六人の女どもは元より知る人ならざれば、いずこの者にや名をだに知らず。元より夫髪八には深く包んではべりしかば、髪八は始めよりこれらの事に預らず、夢にも知れる事ならず」と僅かに白状したりける。白粉は呵責に耐えずして、僅かに「小蝶に頼まれし」と白状に及ぶのみ、「その余の六人の女どもは何処の者にや知らず」と陳じて、さてその後は責め問えども、又、云うとも無かりしかば、「さらば小蝶を絡め捕らば、彼の六人も必ず知れん。その者共はまず置きね」と重門は下知して、髪八と白粉を厳しく牢屋に繋がせ、更に虎右衛門に下知する様、

「聞くが如くに、その小蝶は津の国の天王寺村の者になん。これ隣郡の民にして、天野の判官遠光の領分にある。さすがに他領へ踏み込んで、絡め捕る事はし難し。汝は彼の地へ赴いて、密かに天野の判官に事の由を告げよかし。彼の人必ず絡め捕り、此方へ渡すべきものなり。しかれども表立って取次ぎ人に付いて云えば、その事が漏れ易くて、彼の曲者らに知られもせんか。しからはは捕り逃がす事もあるべし。よくよくこれらに心を用いて、よしや彼の地に到るとも漫ろに城中へ入らずして、便宜の人を尋ね問い出頭人をこしらえて遠光に見参し、事しかじかと我が意を伝えよ。この余の事は状にあり、よくせよかし」と説き示し、遠光へ送り遣わす自筆の状を渡しにければ、虎右衛門は一議に及ばず、主君の状を受け取って、忙わしく宿所に退き、俄かに旅の用意をしつつ、供人四五人従えて難波を指してぞ急ぎける。

○かくて屋久手虎右衛門は日ならず津の国の天野家の城下の町に到着し、茶店の床机に尻を掛け、便宜※の人に会わまく思えば、それとは無しに茶屋の主人に余所余所しく尋ねる様、

「天野殿の出頭人※に城下に町宅したまうも一人二人は在るなるべし。そは何と云うやらん」と問えば主人は小首を傾け、

「然ればとよ、ここの町のさる人がありとは聞こえず、但し、天王寺の隣村に一人の女右筆※あり。そは当館の右筆なりし宋家の押司殿※の娘にて、その名を大箱と呼ばれたり。されば父親の押司殿は先の年に世を去って、家を継ぐべき男子無し。しかれども大箱殿は▼天生物書く技に賢しくて、親のいまそのりし※日にその務めをすら見習って、公様の文筆は男にもます事ありと世の風聞に聞こえしかば、当館が聞こし召しけん。召し出して試みたまうに、人の噂に露ばかりも違わず、只これのみにあらずして、その心様は慈悲深く、忠信孝義の操正しく、義の為には銭を惜しまず、人の落ち目を救う事、幾たりと云う数を知らず。例えて云えば、春雨が良く草木を養うに似たり。

これにより人あだ名して春はる雨の大箱おおはこと云えり。又、顔色が浅黒ければ薄墨うすずみの大箱おおはことも呼びなし、又、男おとこ魂たましいの大箱おおはこなどとも呼びなしたり。かくまで目出度き婦人なれば、当館やかたは感心あって、父の知行ちぎょうをそのままに下し置かれるのみならず、亡き親の後役あとやくに大箱殿おおはこを仰せ付けられ、右筆ゆうひつになん成したまう。これらの業を人もなげに女に仰せ付けられるは烏澁うすずみの御計ごけいらいに似たれども、今の浮世は都にも女武者所おんなむしゃどころを置かせたまいて、国々にもその事あり。されば当館やかたの女武者にも直ひたど鷹いの稲妻いなずま、篠芒しのすすきの朱良井あからいと云う二人の女武者さえあり。かかれば女右筆ゆうひつを公沙汰おおやけざに使たわせたまうも、さのみ怪しむ事には非あらず。元よりその大箱殿しゆくしょの宿所そこは宋公明村めむらにあり、家には母御ははごと園喜代そのきよと云う妹一人がはべるなる。さるにより大箱殿まじは日毎に通い務めして、別に物書き部屋をたまわり、男を交えず務めたまうに、民の訴え何くれとなく私わたくしの計けいらいなく、館やかたのお為になる事もこと更に多かれば、上下の喜び云えば更なり。館やかたも二無おもき者に覚えおせば、出頭しゅとうしつつ務めたまう。重役おもなどにあらねども、この婦人の他に尋ねたまうさる筋おなごの人は無し」と事長おなご々しく告げる折から向こうより来る女子あり。

※便宜べんぎ（びんぎ）：①都合のよいこと。好都合。②よい機会。好機。ついで。べんぎ。

※出頭人しゅとうにん（しゅとうにん）：①その場所に出頭した人。②主君の側にあつて政務に参与する者。③主君の寵愛を得て権勢をふるう者。

※右筆ゆうひつ（ゆうひつ）：①筆をとって文を書くこと。②武家の職名。文書・記録の作成をつかさどった。文官。

※押司おし（おし）：胥吏しより（しより）の意。中国や朝鮮で庶民ながらも役人の仕事をした。

※いまそのり：いらっしゃる。おいでになる。

※知行ちぎょう（ちぎょう）：①職務を執行する。②与えられた知行国の国務を執り行う。③領地や財産を直接支配する。④俸禄。扶持ふち（ふち）。

※烏澁おこ（おこ）：①ばかげていること。愚かなさま。②ふとどきなさま。不敵なさま。

よわい
年齢ねんは二十六七にて色黒けれど人柄まぢふう良よく、町風まちふうならでおとなしく、裳裾短もすそかにつまからげ（まくり上げ）
※、既に此方こなたへ近づあづく程ほどに、茶屋あの主人あるじが指差さして、「あの方様かたさまこそ、今云いまいつる大箱殿おおはこにて候まなれ」と告つげるに、領うなずく虎右衛門とらえもんは忙いそわしく立ち出でて、大箱おおはこにうち向むかひ、
「卒爾そつじながら、それがしは播磨はりょうしげかどの郡領重門ぐんりょうしげかどの家いえの子こ（家臣けんざん）にて、屋久手虎右衛門やくでとらえもんと呼ばよばれる者ものなり。主君重門しゅくんしゅもんの使つかいを承うけり、密々ひそひその議ぎをもつて天野あまのの殿とのに見参けんざんを乞こひ願ねがひ候まものから、相知ある者ものの無なきにより事速ことすみやかにものせられん取次とりつぎぎ人を尋ねるに、御身おんみは大箱殿おおはことやらん。高名こうめいかねて承知しやうちせり。案内あんないせられれば幸あいならん。主人あるじの書状しよじょうここにあり、何分なにぶん頼たみ奉たてまつる」と云いうに大箱おおはこは小腰こごしをかがめて、

「御推量ごすいりょうに違ちがはずして、私わらわすなわち大箱おおはこなり。播磨はりょうしげかどの殿とのより仰おほせ越こされる密義ひそぎとは何事なにごとやらん。品しやうによって御取次ごとりつぎ致いたすべきに」と裏問うらもんえば、虎右衛門とらえもんは声こゑを潜ひそめて、

「密事ひそごとと云いえるは余あの儀ぎに非あらず。予あねても聞きし召めされけん。去いぬる水無月みなづきの初はめつかたに摩耶山まやさんの辺へにて、三世さんせい姫ひめと天国あまくにの宝剣ほうけんを奪ない盗たつたる七人ななたりの曲者くせもの女くせものは当国どうごく天王寺てんおうじの村長むらおさの小蝶こちやうと云いえる者ものの由よしはその同類どうるいの白粉しろこ夫婦ふうふが既に早はやや絡かめ捕とられ、彼女かのじやうの白状はくじやうによって分明ぶんめいなり。その余あの六人むたりの曲者くせものらは姓名か未なだ定さかならねど、彼かの小蝶こちやうだに絡かめ捕とらば、知しれずと云いう事ことあるべからず。かかれば小蝶こちやうを絡かめ捕とり、此方こなたへ▼渡わたさせたまわん由よしを頼たみ参まらせられん為ために、それがし使つかいにたちたるなり。御身おんみは殿とのの出頭しゅとうにて、且まつ、心延こゝろのびえ（性格せうかく）※もまめやかなる由よし、予あねて噂うわさに聞きけるをもて、かかると聞きせしむるのみ。この儀ぎ※をもつて御取次ごとりつぎを頼たみ奉たてまつる」と囁ささやくにぞ、大箱おおはここれを聞きながら心こゝろの中に驚おどきしが、さらぬ様さまにて領うなずいて、

「そは一大事いちだいじの密議ひそぎにこそ、仰おほせの趣おもむきは心得こころえはべり。私わらわが城おしろに赴おもむいて、事ことよく計けいらいはべらん

が、判官の対面あるまでにはしばらく程のあるべきなり。私再びここへ来て案内しはべらんに、待ちわびしく覚さんが、ここにて待たせたまえかし」と云うに虎右衛門は喜んで、

「しからばここにて待ち候わん。何分宜しく、宜しく」と云うを大箱聞き捨てて、忙わしげに城の方に行く様にして、道引き違え、腹の内に思う様、

「・・・多力の小蝶とは姉妹の義を結び、誓いし事もありけるに。いかなれば、彼の人は大事を思い立ちながら、予ねて私に告げざりけん。何はともあれ我が姉を救わずばあるべからず」と思案をしつつ彼方を指して、しきりに足を早める程に、日頃相知る借馬引きが此方を指して来るに会いけり。これ究竟と呼び止めて、

「私は火急の御用あれば、その馬をしばし借りてん。程も無く帰り来べきに、六辻の辺で待ちねかし」と云うより早くうち乗って、馬の搔きを早めつつ、天王寺村を指して走らせけり。この時の世の習いにて、女もをさをさ武芸を嗜みて※、馬にも乗り、弓をも引かぬ者としては稀なりけるに、大箱はこと更に馬上の駆け引き違者にて、またたく隙に乗り付けたる。多力の小蝶の門辺の柱に馬を繋ぎ止め、案内知ったる事なれば、音ないもせで忙わしく奥の間指して赴きけり。この時小蝶の宿所では二網、五井、七曲らの姉妹は近江の唐崎へ立ち帰り、只、呉竹、著、味鴨らのみ、奥の座敷にうち集い、三世姫の御為に義兵を挙げん密議の他に、又、他事も無く日を送る程に、思い掛け無く大箱が慌しく奥まで来て、しきりに小蝶を呼びしかば、小蝶は驚き怪しんで、そのまま一人で出迎えて、

「此は春雨が来ませしか。常にはあらず慌しきは事もやある」と問わせもあえず大箱は声を潜ませ、

「事急なれば口義は置かぬ。いかなれば御身たちは由無き謀反を企てて、罪を天下に得たまいたる。既に彼の白粉とやらんは絡め捕られて、白状により播磨より御身の事を告げ越されぬ。今宵討っ手が向かうべし。三十六の謀り事も逃げるに増す事無しと云えば、姫上の御供して、さあさあ影を隠したまえ。これらの由を知らせん為に辛くして走り来ぬ。さあ落ち仕度をしたまえかし」と云うに小蝶は驚いて、

「今に始めぬ御志、いつの世にかは忘るべき。教えに任して程も無く、当所を立ち退き候わん」と云う声聞いて、次の間より呉竹、著、味鴨らが襖を開き立ちいづれば、小蝶はこれを見返って、「大箱の刀自、この人々は私と一味の婦人にて、彼女は智慧海の呉竹、指神子の著なり。これは赤頭の味鴨なり」と、一人一人に引き合わせれば大箱は頷くのみ、

「予ねてその名は伝え聞いたる姉御たちにて御座するに、事急なれば名、対面の口上を述べる暇無し。ともかくもよく談合して命を全うしたまえかし。早まからん」と云い掛けて、外の方指して立ちいでつつ、その馬に打ち乗って、鞭を上げてぞ馳せ去りける。

小蝶はしばし見送って、再び奥の一間に集って、いかにすべきと語らうに、呉竹は騒ぐ気色無く、「三十六計走るを良しとす。姫上の御供をしつつ、早く近江へ走るべし。彼処には二網姉妹あり、彼女の宿所へ落ち着いて、又、談合をすべきのみ」と云うに小蝶は頷いて、

「今、大箱も三十六計逃げるを良しとす、と云いにき。さらば急げ」と云う程に、俄かに家材を取り出して、

「これを幾荷にか荷作らせ、召使う▼男女にも事の由を告げ知らせて、従い行かんと云う者はこれ

を留め、又、身の暇を乞う者は全てその心に任せ、呉竹、蕃の両人は軍用金を腰に付け、姫上の御供して、まず伏見まで赴くべき船出の用意をしたまえかし。私は味鴨と諸共に物をよくよく取り整え、後より追い付きはべりなん」と云うに従う呉竹、蕃は三世姫を守護しつつ、船場を指してぞ急ぎける。

※からげる：①紐などで縛る。②着物の裾や袂（たもと）をまくり、落ちないようにとめる。

※心延え（こころばえ）：①心のありよう。心構え。②人の性質・性向。 ※儀：①儀式。典礼。②ことがら。こと。

※嗜む（たしむ）：①芸事などを習って身につける。②好んで親しむ。③おこないに気をつける。つつむ。④用意しておく。

○さる程に大箱は六辻の辺へ馬乗り戻して、借馬を返して値を取らせ、元の茶店に赴いて、虎右衛門の案内をしつつ、城中へ伴って、かくと君に聞こえ上げしかば、判官遠光は由を聞いて、問注所へ立ち出て虎右衛門に対面しつつ、播磨の重門の書状を見て、うち驚くこと大方ならず、

「かかれば小蝶は謀反の張本（人）※。同類数多なるべきか、その儀も計り難ければ我自ら打ち向わん。用意をせよ」と急がして、軍兵を集うる程に、遠光思案を巡らすに、小蝶は謀反の本人なれども云えば女の事なるに、こう物々しくいで発てば後の批判も後ろめたし。されば先手の大将には我が家の女武者の稲妻、朱良井の両人こそ相応しかるべき者なれとて、彼の両人を先に進ませ、その身は二三百人の同勢を相従えて、すなわち屋久手虎右衛門をも見届けの為、引き連れつつ、その夜初更の頃おいに天王寺村へ押し寄せて、小蝶の宿所へ近付きけり。

その時稲妻思う様、

「……我が身は小蝶と親しくて、この年頃親類に異ならずとこそ思いしに、今この討っ手に向かうとて、絡め捕って何にせん。さあ落さばや」と思案しつつ、たちまちに立ち留まり、判官に申す様、

「そもそも小蝶の宿所の出口は三方へ逃げ道あり。殿は表門に向わせたまえ。朱良井は東の方なる出口を守って、打ち留めたまえ。私は背門より込み入って、一人も漏らさず生け捕るべし」と真しやかに申すにぞ、朱良井もまた予てより小蝶を落さんと思う心あれば、進み向かって申す様、

「稲妻が申す趣は私もしかぞ思いはべれど、東の方は足場が悪し。彼処よりはいづべからず。私が背門より向かいはべらん。この儀を許させたまえかし」と云うを▼稲妻は押し止め、

「その儀はともあれかくもあれ、私は折々彼処に至り、案内をよく知ったり。かかれば背門より向わん者、私が他に誰やはある」と云うに遠光は頷いて、

「稲妻いしくも申したり。汝は背戸より向かうべし。朱良井は東の方、我は表の方より向わん。さあさあ急げ」と苛立ちたる。主命なれば朱良井は争いかねて、渋々ながらその手分けにぞ従いける。

この時小蝶は味鴨諸共なおも宿所に在りけるに、たちまち家の四方より、鬨の声ひどく聞こえて、討っ手向かいぬと覚えしかば、予てより積み置きたる焼き草に火を掛けて、煙りの内より只二人、

手に手に刃を打ち振り、打ち振り、込み入る敵を斬りなびき、背門の方より走り出るを待ち設けたる稲妻が「ソレ逃がすな」と口には云えど、絡めんとする擬勢も無く、道を開いて通すにぞ、小蝶

は「得たり」と味鴨諸共、近づく敵を切り倒し、又かい拵んで礫に取り、人無き境に入る如く、船場の方へ落ちて行く。稲妻早くもこれを見て、「多力殿、氣遣いすな。私がかここに在るぞかし」とひそめき告げるを聞き捨てて、二人は早くも落ちて行く。かかる所に朱良井の一手の雑兵、道を横切り、絡め捕らんとひしめくを朱良井「ヤヤ」と呼び止めて、「小蝶は確かに西へ走れり。名も無き女子

を討ちとめて、何にすべき」と止める隙に、早く小蝶も味鴨も再度の虎口※を免れて、行方も知らずなりにけり。

※張本（ちょうほん）：①悪事などを起こすもと。張本人。②前もって準備しておくこと。

※虎口（ここう）：きわめて危険な場所や状態。

○さる程に呉竹、^{めどぎ} 蕃らは先に船場へ赴いて、^{ふなば おもむ} ▼早船の用意をしつつ、^{はやふね} 三世姫を船の内に深く忍ばせ^{たてまつ} 奉り、小蝶を待つにまだ来ねば。二人は心安からねど、彼女を迎えの為にと天王寺の方に立ち帰るに、程良く小蝶に会いしかば、^{あじかも} 味鴨諸共うち連れて、行く左右より捕り手の雑兵、^{ざつびょう} 「捕った」とかかるを呉竹、^{めどぎ} 蕃が心得たりと抜き打ちに、等しくだうと斬り伏せて、とどめ刺す間も^{なにわがた} 難波渦間に紛れて四人連れ、出船の方へと急ぎけり。

けいせいすいこでん だいしへん きょくていばきん うたがわくにやす
傾城水滸伝 第四編ノ三 曲亭馬琴著 歌川国安画

さる程に天野の判官^{はんがんとおみつ} 遠光は網の魚ぞと思いたる小蝶らを捕り逃がして、一人も絡め得たりしかば、播磨家の使者^{やくでとらえもん} 屋久手虎右衛門らが思わん程も面目無く、心しきりに^{いらだ} 苛立つままに、その^{ほとり} 辺なる村の^{なんによ} 男女を皆事如く絡め捕り、

「これも小蝶の同類ならん。彼等も謀反人なるべし」とて、^{むほんにん} 強いて拷問しつれども元よりさる者ならざれば、小蝶の行方を尋ね知るべき^{ゆすが} 縁は更に無かりける。

その時、村の男女は皆諸共に申す様、

「例え、いかばかりに責めさせたまうとも我々は露ばかりも謀反の密議に預からねば、^{さんせひめ} 三世姫の事は更なり、小蝶の行方は知り候わず。但し小蝶の家の奴婢^{ぬひ} どもの多くは主に従って共に^{ちくでん} 逐電したれども、その中に身の暇をたまわって残り留まりし者もあり。彼等に問わせたまわれれば、彼の^か 同類の^{なところ} 名所が知れずと云う事あるべからず。この儀を願ひ^{たてまつ} 奉る」と異口同音に申すにぞ。

^{とおみつ} 遠光ようやく納得して、

「しからは、その者共^{すみ} を速やかに捕らえよ」とて里人らを皆許し、残り留まりて村にありける小蝶の家の^{なんによ} 男女を^{みよたり} 三四人絡め捕り、再び^{せんさく} 詮索してければ、皆々ひとしく申す様、

「小蝶と日頃親しき者は^{ちえのうみ} 智慧海の呉竹、^{くれたけ} 赤頭の味鴨、^{あかがしら} 指神子^{あじかも} 蕃らなり。又、近江の^{すなど} 漁り女に^{おおとしま} 大歳麻二^{ふたあみ} 網、^{さちがみずいつつい} 氣違水五井、^{きしほじん} 鬼子母神七曲と云う姉妹あり。これらも親しき友達にて密談したる事はありしが、そは何事を談合しけん。訳は得知らずはべり」と云うを^{とおみつ} 遠光聞いて、

「しからんには小蝶は呉竹らと諸共に^{さんせひめ} 三世姫を守りか^か しづいて、彼の^{ふたあみ} 二網の^{しゆくしょ} 宿所へとて走りたるにぞあらんずらん。かかれば我が^{いっこ} 一己の力に及ぶべき事にはあらず、^{とらえもん} 虎右衛門は立ち帰り、これらの^{ぐんだい} 由を^{そうら} 郡題殿へよくよく伝え候え」とて、▼絡め捕ったる小蝶の奴婢をそのまま渡しにければ、^{とらえもん} 虎右衛門は止む事を得ず、その者どもを引き立てて、明石の浦へ帰りつつ、主君にかくと告げにければ、^{ぐんりょうしげかど} 郡領重門は由を聞いて、且つ驚き且つ呆れ、

「しからは近江の^{おうみ} 唐崎へ討つ^{つわもの} 手の兵を遣わして、^{ふたあみ} 二網らを絡め捕るべし。とくとくせよ」と^{いらだ} 苛立て、まず京都の守護なりける伊賀の判官^{はんがんみつすえ} 光季に訴え聞こえ、近江の守護の^{おうみ} 佐々木家へも^{しゆご} しかじかと

謀じ合わせよとて、すなわち屋久手虎右衛門に二百余人の兵を差し添えて、唐崎へとて遣わしける。

かくて虎右衛門は我が妻の弟の岡田の引蔵と天王寺村より生け捕り来ぬる小蝶の下部を案内者として、俄かに播磨をうち発ちつつ、しきりに道を急がして、唐崎指して押し寄せる。その事の体たらく、いといかめしくぞ見えたりける。

○かかりし程に小蝶らは三世姫を守護しつつ、呉竹、蕃、味鴨諸共、その夜の内に伏見に至り、次の日は既に早や唐崎に赴きつつ、二網の宿所に至って、事の由を告げ知らせ、五井、七曲にも対面して、白粉夫婦が儂くも絡め捕られし事をのみ、いと惜しみ語り出て、一日二日と過ごす程に、播磨の郡領重門が家の子(家臣)の屋久手虎右衛門に数多の兵を差し添えて、追討せんとしつる由、俄かにその風聞あり。追っ手の兵二三百人が早や近づきぬと聞こえしかば、小蝶は心安ならず、「此はいかにせん」と語らうに、呉竹は騒ぐ気色無く、

「彼の屋久手めが、懲りずまに幾百人にて向かうとも何程の事をすべき。奴等を皆殺しにせん事は大歳麻ら三人の姉妹にて事足れり。さばれ指神子の法術をいささか借りずばよくし難し。その謀り事は斯様斯様」と手に取る如く説き示し、

「多力主は姫上を守りかしづいて、船路より野洲の方へ打ち渡り、此の姉妹の巧妙手柄を彼処で遠見したまえかし。私も味鴨諸共に姫上の御供せん。いざさあさあ」と急がし立てれば小蝶はこの儀に従って、三世姫を抱きつつ用意の小船にうち乗れば、呉竹も味鴨もひとしく船にうち乗って野洲の方へぞ赴きける。

○さる程に屋久手虎右衛門は所の者を案内にて、二網の家の四方を稲麻※の如く取り巻かせ、おめき叫んで乱れ入るに、人一人も在らざれば、「これはいかに」と呆れ果て、なお又、案内の浦人に日頃の様子を尋ね問うに、

「二網、五井、七曲らは日毎に船にうち乗って、野洲川の辺に赴いて、釣り糸を垂れ網を下ろす、出設定かならざれば今日も彼処にあらんずらん」と云うに虎右衛門は頷いて、船ども数多借りもよおし、三百余人の兵諸共に野洲の方へ押し渡るに、彼処は葦葦生い茂り、行く先定かに見え分かねば、密かに心疑って進みもゆかず、たゆたう(ためらう)程に、たちまち茂き葦の内より、

「安からぬ世を安川と▼思わずば、命を水に任せやはする」かく繰り返し歌いつつ、小船を静かに漕ぎ出す者あり。虎右衛門は遙かに見て、「あれはいかに」と尋ねるに、船の内に知れる者あり、「あれこそ、二網の妹の氣違水の五井なれ」と云う言葉、未だ終わらず、五井此方を指し招いて、

「やおれ、討っ手の大将は民を虐げ物を欲しがらる播磨の屋久手虎右衛門よの。汝ら幾百人にて寄せ来るともこの湖は我が家なり。何処を指して捕らうべき。由無く波路に漂わんより、さあさあそこを退けかし。迷いを取ってたゆたわ(躊躇)ば、たちまち頭を失うべし。さあさあ帰れ」とあざ笑えば、虎右衛門は大きに怒り、弓に矢番い「ひょう」と射るに、その矢は反れて五井は早や水中へ飛び入って行方も知らずなりにけり。

※稲麻(とうま): イネとアサ。

その時、虎右衛門は船を葦辺に漕ぎ寄せさせて、五井が乗り捨てたる船を奪い捕らせるに、又、一漕の釣り小船が葦押し分けて漕ぎ出でたり。これすなわち別人ならず、鬼子母神七曲なり。此方を見つつ▼高笑いして、

「やおれ、虎右衛門。この七曲を知らずやある。そのまま逃げて帰ればよし。なまじいに追い迫らば、我決して汝を許さじ。山の神より恐ろしき鬼子母神の冥罰（仏罰）※を受けるや、いかに」と呼ばはるにぞ。虎右衛門はいよいよ怒って、「あれ追い止めよ」と息巻き猛く船を早めて、追っかければ七曲も船を漕ぎ戻して早く葦間に隠れけり。「遠くは行かじ、逃すな」とて、しきりに船を漕がせるに、七曲は早や見えずして、乗り捨てたる船のみ岸边にあり。

※冥罰（みょうばつ）：神仏が懲らしめに下す罰。

「かかれば陸に上がりしなり。さあ追っかけよ」と下知すれば、雑兵らが皆云う様、
「陸には葦葦なお生い茂り、何処を道ともわきまえ難きに彼女等のいかなる謀り事のあるべきもまた知り難し。まず一兩人が岸に上って、行く先を見せたまえ」と云うに虎右衛門は「実にも」と悟って、雑兵隊二人を遣わせしに、待てども待てども帰り来ず。余りにひどく待ちわびて、此の度は引蔵を遣わせしに、これもまた帰り来ざれば、虎右衛門はいよいよ苛立って、自ら水際に下り立って、様子を見んとて立たまくせしに、たちまちに風さっと音して、船の揺らめく程しもあれ、葦葦の茂きが元より猛火※が俄かに燃えいでて、早やあちこちに移りしかば、二百余人の兵らは「此はそもいかに」とうろたえ騒いで、陸に上らんとしつれども陸にも水にも火は燃えいでて、逃るべくもあらざるに、船にすら火は燃え移り、焦熱地獄に異ならず、たまたま水に飛び入って逃れんとする者も水に溺れて命を落とし。陸に上らんとせし者は皆、火に焼かれて、いずれの道にも逃れる者は無かりけり。その中に虎右衛門は始め火の燃えいづる時、既に陸に上らんとて、船の舳先に立ちしかば、早くも陸に躍り上がって、しきりに葦を掻き分け、掻き分け、辛うじて二三町、走り抜けんとする程に、たちまち葦の内よりして、白き腕を差し伸ばし、虎右衛門の襟髪つかんで小脇に引き付け、しっかりと抱いて、いささかも動かさず、いとも易げに生け捕って、足に任して野洲川の川上指して走りけり。

かくまで手軽く虎右衛門を生け捕りし者は別人ならず。これすなわち二網なり。

※猛火（みょうか）：はげしく燃える火。もうか。

かくて二網は虎右衛門を小脇に抱いて、野洲川の上へ赴く程に、一隈高き松の元に小蝶は三世姫をかき抱いて、呉竹、味鴨諸共に悠然として居たりける。その時▼二網は虎右衛門をどっかと下して、首筋取って押し据えれば、小蝶はうち見て、きつと睨まえ、

「やおれ、虎右衛門。汝は不義の宝を欲して民を損なう小人なるに、頼家卿の姫上を討ち奉らんとしたる天罰。今こそ思い知りつらめ。覚悟をせよ」と罵る程に、五井は引蔵の首を引き下げ、七曲は雑兵の頭を数多斬り掛けて、松の陰より現れ出で、

「見よや虎右衛門。先に汝が遣わしたる雑兵をも引蔵をも我々既に生け捕って、かくの如くに行ったり。皆これ軍師呉竹殿の謀り事なるを知らざるや」と罵る声と諸共に、蓄は髪を振り乱し、手には刃を引き下げて、木陰を出で、微笑んで、

「先には我、又、風を祈って、汝に従う兵を焼き討ちにして滅ぼしたり。例え汝ら幾万騎にて

絡め捕らんと計るとも及ぶべき事にはあらず。肝が潰れるか」と責め懲らされて虎右衛門は驚き恐れ、齒の根も合わず、しきりに声を震わして、

「御腹立ちは道理なれども我は心からせし業ならず、只主命によるものなれば止む事を得ざるにあり。命を助けたまえかし」と云わせもあえず二網は取った襟髪ぐっと引き締め、

「この期に及んで無益の繰言。首ねじ切って捨てんず」と云うを小蝶は押し止めて、
「そ奴を助けて帰すとも又、何事をかしいだすべき。左右の耳を削ぎ取って、命ばかりは助けてよ」と慈悲ある詞に二網は腰の刃を抜き出して、虎右衛門の耳を削ぎ取って、「命冥加な痴れ者め。とっとと去ね」と引き起こし、そのまま追い放せしかば、虎右衛門は小鬘を抱えて鼠の如く逃げ失せけり。

その時小蝶は呉竹らと身の行く末を語らうに、呉竹は案ずる気色も無く、
「その事は予てより私に思う所あり。当国伊香郡の賊が岳には賽博士巨綸、天津雁真弓、女二王杉木、虎尾の桜戸らが先つ頃より砦を占めて、軍兵八百余りあり。これにより第五番の頭領の暴磯神朱西と云う勇婦が同国の菅野浦に酒店を出して居り、群れに入らんと云う者あれば手引きすると伝え聞きぬ。彼女等の群れに入る▼時は官軍なりとも恐れるに足らず。この儀に従いたまえかし」と云うに小蝶は喜んで、皆諸共に船路より菅野浦へ赴いて、朱西の店を訪れ、事の由を告げ知らせ、群れに入らんと頼みしかば、朱西は大きに喜んで様々にこれをもてなし。さて弓矢を携えて、端近く立ち出つつ、遙か向かいの葦の内へ鏑矢を射入れしかば、たちまち葦の内より一人の雑兵が早船を漕ぎ出して、此方の水際に寄せるになん。朱西は賊の砦へ小蝶らの事を知らせ遣わし、その夜酒宴の席を開いて小蝶らを厚くもてなし。明けの朝、朝飯果てて、一艘の大船に三世姫と七人の勇婦らを打ち乗せて、朱西も同船し、賤が岳へ赴く程に巨綸は麓まで乗り物七挺いださせて、彼の人々を迎えけり。

賤が岳の砦の主人の賽博士巨綸は昨夜菅野浦の朱西の元より、小蝶ら七人の事の趣をしかじかと告げ越したるを聞きながら頷いて、

「その小蝶、呉竹らは名の聞こえたる者共なれば、よくもてなさずば笑われん。用意をせよ」と急がして、その明けの朝未だきより、見ほし(見張り)の人を諸所に出しつ、すなわち迎えの為にとて七挺の乗り物を麓の方まで遣わして、今や来ると待つ程に、見ほしに立ちたる雑兵らが只、櫛の齒を引く如く、次第次第に注進(報告)※して、「早や近くへ来ぬ」と告げしかば、巨綸は杉木、真弓、桜戸ら三人の頭領と諸共に前門まで出迎えて、誘いたてて、大書院の上座に誘うに、小蝶らはその座に着かず、互いに譲り譲られつつ、小蝶は三世姫に引き添って、六人の勇婦とともにようやく客座に着きしかば、巨綸は杉木、真弓、桜戸らの三人と共に主人の席に座を占めれば、朱西はその方辺に居り、一人一人に名を告げて引き合わせれば、巨綸は小蝶らにうち向かい、

「各々の高名は雷が耳に轟く如く、ここへも聞こえてはべりしかば。いと頼もしく思うものから、面を合わせるに由無きをいと本意無くも思いたりしに、図らずも打ち揃って来臨在りしは此上無き幸い。何事もこれに増すべき、見られる如く山籠もりして▼広き浮世を狭くすなれば、もてなし参らせる物は無けれど、うちくつろいで語らいたまえ」と云うに小蝶も膝を進めて、

「我々は難波の落人、只、災いを避けん為に同盟の婦人と共に当所に参って、下風に立ち火焚き水汲む業なりともなさばやと思いに、こう懇ろなる御もてなしは思い掛け無き身分に過ぎたり。但

しここに渡らせたまうは頼家卿の忘れ形見、三世姫にて御座しますなり。我々は女子なれども親の時より鎌倉殿の御恩によって世を安く渡しし由は忘れる時無し。しかるに執権義時の非道の沙汰におめおめと鎌倉へ渡されて失われたまわん事の痛ましく口惜しさに。この人々と示し合わせつ、斯様に計らって摩耶山の辺にて姫上を取り参らせしに、その事早く露見に及んで討っ手の兵うち向かいしを斬り散らし走り去り、近江の唐崎まで退きつ、二網ら姉妹と一つになって、再度の討っ手を皆殺しにしたれども、身を置く所無きままに、かくは推参しはべりぬ。始めを云えばしかじかなり、終わりは斯様斯様なり」とて事つまびらかに告げにければ、巨綸は耳を傾けて感ずること大方ならず。予て用意の鉋子、土器、羹、酢の物、種々の肴も次第に数を尽くして、杉木、真弓ら諸共に差しつ押さえつ浅からぬもてなし振りに時移り、日もやや西に傾くにぞ。小蝶らは酩酊して、席にたえずといろひしかば、巨綸もさのみはとて盃を納めつつ、山の半ばなる亭座敷を▼人々の旅宿にとて雑兵らに心得さしつ。やがて案内に立たせしかば、小蝶らは浅からぬ喜びを述べ別れを告げて、三世姫に傳きつつ、亭座敷にぞ赴きける。

※注進：①事件を記して急ぎ上申すること。②事件を急いで目上の人に報告すること。

○かくて小蝶は亭座敷にて六人の友と円居しつつ、巨綸の大方ならぬもてなしを深く感じて、「かかれば今より我々が身を置く所はい出来たり。皆々喜びたまえ」とて、心良げに打ち語らえば、
「真にしかぞはべるなる。我々ここにあらんには第一に姫上の御身の上は安かるべし。よき味方を得たりき」と、等しく絶えて止まざりしを呉竹一人は何とも云わず、方辺に向って嘲笑うを小蝶はうち見て、
「ナウ、先生。我も人も喜ぶ中に御身一人はさは思わずや。笑いたまうはいかなる故ぞ」と問えば呉竹声を潜めて、
「然ればとよ、その事なれ。御身は只、彼の巨綸が云いし言葉を真として、彼女の心を見たまわず、あだ誉めをのみしたまうが、片腹痛くはべるかし」と云われて小蝶は心を得ず、
「彼女が云いつる言葉を見て、心を見ずとはいかなる故ぞ」と再び問えば呉竹答えて、
「彼の巨綸は胸狭くして、おのれに勝る者を愛せず、女子には稀なる小文才ある故にをさをさ虚文を旨として、萬の事に実情無し。さるにより、乗り物をもて我々を迎えさせ、酒宴をもうけて、饗応の大方ならず見えるものから、彼の時、御身がしかじかと三世姫の事を告げ知らせ。又、討っ手の軍兵を皆殺しにせし体たらくをつぶさに示したまいしかば、巨綸たちまち顔色変わって、密かに恐れる気色あり。されども口には勇ましげに受け答えしたるにより、御身は彼女が云いつる事を真なりきと書いたまえり。この故に言葉を愛して心を見ずと云いしのみ、思うに彼の巨綸はいかにして我々をここに留める事をせんや。事にかこつけ難渋して追いやらんと謀るらめ。かくても悟りたまわずや」と事の心を説き諭せば、小蝶は思わず大息付いて、
「云われる趣はさもあらん。しからば事の難儀に及べり。いかにすべき」と潜めき問えば、呉竹にっことうち笑んで、
「さのみ心を苦しめたまうな。我儕今日つらつらと彼の人々の気色を見たるに、杉木も真弓も巨綸に等しく、先つ頃、滅びたる柴田、梶原の残党なれども只身の為と思うのみで、忠義無二の者には非ず。一人、虎尾の桜戸のみ心映えなり武芸なり、彼の三人にはたち優って、その下風に立つ者にはあら

ねど、勢い止む事を得ざるをもて、^{かえ}反^かつて^{みたり}彼の三人の下に居り、先に^{えせはかせおおいと}賽博士巨綸の受け答への薄情なるを桜戸一人が^{いきどお}憤り、しばしば巨綸を^{おおいと}睨みたり。我儕が桜戸に会わん時、三寸不爛の舌（口達者）をもて、^{ひそ}密かに彼女を励ませば、彼女等必ず仲間割れして、我が幸いとなるべし」とて、^{たけなわ}歓談、^な酣なる折から、桜戸が^{りよしやく}旅宿に來にければ、小蝶、呉竹は出迎えて、浅からぬ今日のもてなしの喜び述べて止まざりしを桜戸は^{けしき}恥たる気色にて、

「諸先生は^{ぎふけんじょう}義婦賢娘多く、^{えがた}得難き客人なるに、いかにせん巨綸の胸広からねば、^{おおいと}賢を忌み能を^{けんい}妬んで片腹痛き事多かり。いと^{くちお}口惜しく思いながらも、我が身がその位にあらざれば、心ならずも^{もだし}黙止するのみ。無礼を許したまえかし」と云うを小蝶は聞きながら、

「いかでかはさる事あらん。▼^{おんみ}さても御身は都にて彼の^か亀菊に憎まれて、無実の罪に落し入れられ、^{はいしょ}佐渡の島根に流されたまいし。配所^かにても彼の^{どもがら}輩が焼き殺さんと謀りし由、世の^{ふうぶん}風聞に伝え聞きしが、^{なにびと}何人の手引きによって、ここへ^お落ち着きたまいしにや」と問えば、桜戸は

「然ればとよ、^{わらわ}私が佐渡に在りし時、折瀧の^{おりのたき}節柴主の助けを得たる事多かり。我身がここへ^{のが}逃れ來たのも彼の^か賢婦人の^{さしず}指図によれり」と云うに呉竹は進み出て、

「^{ふししば}節柴主は名家の子孫。客を愛して財を惜しまず。一芸^{たから}優れし者とし云えば、^お落ち目を救いたまうとぞ。私も^{わらわ}予て^{かね}伝え聞きにき。まいて^{おんみ}御身は都の^{れきれき}歴々、^か武芸拔群なるのみならず心映えの賢なるを彼の^か人よく知りたまわらずば、いかでか^{おおいと}危急の時に臨みて、ここへ^{おんみ}手引きをしたまうべき。これへつらうて云うには^おあらず、これらをもつて論ぜんに、巨綸は^{おんみ}第一の座を御身に譲るべき事なるに、^{そま}^{おぞ}杣木、^お真弓が上にだも^お得置かざるこそ^お悍ましけれ」と云われて桜戸は^お吐息を付いて、

「^{のたま}そは宣う事ながら、^{わらわ}私は^{こよ}此上無き（^{ざいにん}比類無い）^お罪人にて、^{おのおのがた}命も保ち難かりしをかくてある身は幸いなるに。いかでか^お人の下に居るを不足に思いはべるべき。各々方はこれと異なり、^{さんせひめ}三世姫の御為に^{おんため}義を^{とな}唱え忠を^{よこしま}尽くして、世の^お邪を^{ひめうえ}刈り除かんと欲したまうは^おありがたきまで、いと^{にしき}頼もしき事に^おなん。かくて七人うち^お揃いにて^お姫上に具し^{とりで}参らせて、我が此の^お砦に身を寄せたまえば、^{にしき}錦の上に^お花を添える幸いとこそ^{おおいと}思う中に巨綸これを^{ねた}妬く^{おのおのがた}思つて、各々方を^お留め置かば、その身の害になる事の^{うら}ありもやせん^おと危ぶんでや。追いやらんとする心あり。いと^お恨むべし」と云いつつも^お齒を食いしばれば、^お呉竹これを^お慰めて、

「^{おおいと}巨綸の主がかくまでに^い忌み嫌いたまわれれば、^{よそ}他所に至つて^{よすが}縁を求めん。さのみ^お苦勞したまいそ」と云うに桜戸は^{まなこ}眼を見張り、

「いかでかはさる事あらん。^{おおいと}巨綸もし^{おのおのがた}思い返して、各々方を^お留め置けば、これ^お自他の幸いなり。彼女もし^{おのおのがた}事にかこつけて、各々方を^{ひめうえ}留める事無く、或いは又、^{おんため}姫上の御為に^{わらわ}良からぬ事あれば、私も^おまた^{しよぞん}所存あり。ことの^{じぎ}時宜※によらんのみ、必ず^お後日を^{いとまご}待ちたまえ」と云い^お慰めて、桜戸は^お暇乞いして^お帰りけり。

※時宜（じぎ）：適当な時期

しばらく在つて^{とりで}砦より^{おおいと}巨綸の^お使い來て、小蝶らに^お告げる様、
「^{らいりん}たまたまの^{いっかい}來臨なるに、^{ひめうえ}明日一會^ぐ催さんと^{まい}欲す。姫上を具し^{とりで}参らせて、砦へ^お集いて^お語らいたまえ。余はその^こ折を^{こうじょう}期するのみ」と^お口上を^お述べしかば、小蝶らは^おかたじけなしと^お喜びを^お述べて、^お使いを返し、「この^お事いかがあるべき」と^お問うに^お呉竹は^お微笑んで、

「^{いっかい}明日の一會は^{てん}天がこの^{とりで}砦を^{さんせひめ}三世姫の^{おすみか}御住処に^おたまうものなり。但し各々は^{おのおの}懐劍を^{かいけん}懐に^{ふところ}隠し^お持つ

べし。且つ^{ひめうえ}姫上には小蝶の主、よく引き添って守りたまえ。その余の事は^{りんきおうへん}臨機応変、^{おのおの}各々油断すべからず」と云うに皆々心を^{めどぎ}得て、^{あじかも}明けるを^{ふたあみ}遅しと^{いつつい}待ちたりける。

かくて次の日の巳の頃^みおいに、^{めどぎ}小蝶、^{あじかも}呉竹、^{ふたあみ}著、^{いつつい}味鴨、^{ななわた}二網、^{さんせひめ}五井、^{しゅご}七曲らは三世姫を^{しゅご}守護しつ、^{とりで}つ、^{おもむ}皆へ^{おおいと}赴きたりければ、^{そまき}巨綸は^{あかにし}杣木、^{あかにし}真弓、^{あかにし}桜戸、^{あかにし}朱西らを^{あかにし}従えて、^{あかにし}大書院に出迎えて、^{あかにし}互いの口上事^{あかにし}終わり、^{あかにし}早や酒盛りに及ぶ程に、^{あかにし}盃一順^{あかにし}巡る時、^{あかにし}巨綸の手下の士卒が^{あかにし}大きなる^{あかにし}白木の台に^{あかにし}白金十片^{あかにし}載せたるを^{あかにし}うやうやしく^{あかにし}持って^{あかにし}出て、^{あかにし}小蝶の^{あかにし}辺に^{あかにし}押し^{あかにし}据えたり。その時^{あかにし}巨綸は^{あかにし}小蝶らに^{あかにし}うち向かい、

「世の数ならぬこの^{とりで}砦を^{はるばる}頼みて、^{たてまつ}遙々来ませしかば^{たてまつ}留め^{たてまつ}奉りたくは^{たてまつ}思えども、^{たてまつ}いかに^{たてまつ}せん^{たてまつ}分内^{たてまつ}狭く^{たてまつ}兵糧^{たてまつ}足らねば、^{たてまつ}姫上の^{たてまつ}御為に^{たてまつ}各々方を^{たてまつ}この所に^{たてまつ}留める事を^{たてまつ}致し^{たてまつ}難し。此は^{たてまつ}些少の^{たてまつ}所ながら、^{たてまつ}うまの^{たてまつ}餞に^{たてまつ}参らせる。何処へ^{たてまつ}なりとも^{たてまつ}身を^{たてまつ}寄せて、^{たてまつ}大義を^{たてまつ}成就した^{たてまつ}たまえかし。事成る^{たてまつ}時には^{たてまつ}我々も^{たてまつ}参りて^{たてまつ}麾下^{たてまつ}（部下）※に従うべし。請け^{たてまつ}引き^{たてまつ}たまえば^{たてまつ}幸いならん」と^{たてまつ}言葉^{たてまつ}巧みに^{たてまつ}述べしかば、^{たてまつ}小蝶らは^{たてまつ}只^{たてまつ}呆れ^{たてまつ}果て、^{たてまつ}未だ^{たてまつ}その^{たてまつ}答^{たてまつ}えに^{たてまつ}及ばず。その時^{たてまつ}末座に^{たてまつ}並み^{たてまつ}居たる^{たてまつ}桜戸が^{たてまつ}声を^{たてまつ}怒らし、

「巨綸、^{おおいと}そは何をか^{おおいと}云う。我がこの^{おおいと}山に^{おおいと}来た時^{おおいと}も^{おおいと}汝は^{おおいと}兵糧^{おおいと}足らずと^{おおいと}云いしが、^{おおいと}飯浦、^{おおいと}山梨、^{おおいと}赤尾、^{おおいと}松尾の^{おおいと}二十郷は何の^{おおいと}為に^{おおいと}領する^{おおいと}ぞや」と^{おおいと}云わせも^{おおいと}果てず、^{おおいと}巨綸も^{おおいと}ひどく^{おおいと}怒って、^{おおいと}声を^{おおいと}振り^{おおいと}立て、

「この^{おおいと}痴れ者^{おおいと}が^{おおいと}舌^{おおいと}長し。汝は^{おおいと}頭^{おおいと}の^{おおいと}無^{おおいと}き^{おおいと}奴^{おおいと}なりしを^{おおいと}我が^{おおいと}陰^{おおいと}に^{おおいと}立^{おおいと}て^{おおいと}命^{おおいと}を保^{おおいと}ち。今^{おおいと}身に^{おおいと}不足^{おおいと}無^{おおいと}き^{おおいと}ままに、^{おおいと}杣木、^{おおいと}真弓を^{おおいと}うち^{おおいと}越^{おおいと}えて、^{おおいと}云^{おおいと}いた^{おおいと}き^{おおいと}ま^{おおいと}ま^{おおいと}の^{おおいと}雑^{おおいと}言^{おおいと}過^{おおいと}言^{おおいと}、^{おおいと}云^{おおいと}え^{おおいと}ば^{おおいと}と^{おおいと}て^{おおいと}誰^{おおいと}か^{おおいと}は^{おおいと}聞^{おおいと}かん。そ^{おおいと}こ^{おおいと}退^{おおいと}か^{おおいと}ず^{おおいと}や」と^{おおいと}罵^{おおいと}れば、^{おおいと}桜戸は^{おおいと}い^{おおいと}よ^{おおいと}い^{おおいと}よ^{おおいと}怒^{おおいと}って、^{おおいと}な^{おおいと}お^{おおいと}争^{おおいと}わ^{おおいと}んと^{おおいと}す^{おおいと}る^{おおいと}程^{おおいと}に、^{おおいと}小蝶は^{おおいと}中^{おおいと}に^{おおいと}分^{おおいと}け^{おおいと}入^{おおいと}り^{おおいと}て^{おおいと}双^{おおいと}方^{おおいと}を^{おおいと}押^{おおいと}し^{おおいと}止^{おおいと}め、^{おおいと}さ^{おおいと}て^{おおいと}巨^{おおいと}綸^{おおいと}に^{おおいと}う^{おおいと}ち^{おおいと}向^{おおいと}か^{おおいと}い、

「思^{おおいと}い^{おおいと}掛^{おおいと}け^{おおいと}無^{おおいと}き^{おおいと}過^{おおいと}分^{おおいと}の^{おおいと}賜^{おおいと}物^{おおいと}を^{おおいと}喜^{おおいと}ば^{おおいと}し^{おおいと}く^{おおいと}は^{おおいと}は^{おおいと}べ^{おおいと}れ^{おおいと}ども、^{おおいと}路^{おおいと}用^{おおいと}は^{おおいと}予^{おおいと}て^{おおいと}蓄^{おおいと}え^{おおいと}あり。これ^{おおいと}は^{おおいと}決^{おおいと}して^{おおいと}受^{おおいと}け^{おおいと}難^{おおいと}し。既^{おおいと}に^{おおいと}仰^{おおいと}せ^{おおいと}の^{おおいと}如^{おおいと}く^{おおいと}な^{おおいと}ら^{おおいと}ば、^{おおいと}今^{おおいと}更^{おおいと}頼^{おおいと}む^{おおいと}木^{おおいと}の^{おおいと}下^{おおいと}に^{おおいと}雨^{おおいと}が^{おおいと}漏^{おおいと}る^{おおいと}心^{おおいと}地^{おおいと}は^{おおいと}す^{おおいと}れ^{おおいと}ど、^{おおいと}速^{おおいと}や^{おおいと}か^{おおいと}に^{おおいと}別^{おおいと}れ^{おおいと}を^{おおいと}告^{おおいと}げ^{おおいと}て、^{おおいと}い^{おおいと}ざ^{おおいと}い^{おおいと}ざ^{おおいと}山^{おおいと}を^{おおいと}下^{おおいと}る^{おおいと}べし」と^{おおいと}云^{おおいと}う^{おおいと}を^{おおいと}桜^{おおいと}戸^{おおいと}が^{おおいと}押^{おおいと}し^{おおいと}止^{おおいと}めて、

「多^{おおいと}力^{おおいと}の^{おおいと}主^{おおいと}、^{おおいと}さ^{おおいと}な^{おおいと}宣^{おおいと}い^{おおいと}そ。此^{おおいと}の^{おおいと}山^{おおいと}広^{おおいと}き^{おおいと}に^{おおいと}あ^{おおいと}ら^{おおいと}ね^{おおいと}ども^{おおいと}各^{おおいと}々^{おおいと}方^{おおいと}を^{おおいと}入^{おおいと}れ^{おおいと}難^{おおいと}から^{おおいと}ん^{おおいと}や。ま^{おおいと}ず^{おおいと}ゆ^{おおいと}る^{おおいと}や^{おおいと}か^{おおいと}に^{おおいと}座^{おおいと}し^{おおいと}た^{おおいと}ま^{おおいと}え」と^{おおいと}云^{おおいと}う^{おおいと}に^{おおいと}呉^{おおいと}竹^{おおいと}進^{おおいと}み^{おおいと}出^{おおいと}て、

「虎^{おおいと}尾^{おおいと}主^{おおいと}の^{おおいと}御^{おおいと}志^{おおいと}は^{おおいと}忘^{おおいと}れ^{おおいと}難^{おおいと}く^{おおいと}は^{おおいと}べ^{おおいと}れ^{おおいと}ども、^{おおいと}と^{おおいと}て^{おおいと}も^{おおいと}か^{おおいと}く^{おおいと}て^{おおいと}も^{おおいと}御^{おおいと}身^{おおいと}一^{おおいと}人^{おおいと}の^{おおいと}心^{おおいと}に^{おおいと}て、^{おおいと}我^{おおいと}々^{おおいと}を^{おおいと}留^{おおいと}め^{おおいと}た^{おおいと}ま^{おおいと}わ^{おおいと}ん^{おおいと}事^{おおいと}は^{おおいと}得^{おおいと}な^{おおいと}ら^{おおいと}じ。や^{おおいと}よ、^{おおいと}姫^{おおいと}上^{おおいと}を^{おおいと}具^{おおいと}し^{おおいと}参^{おおいと}ら^{おおいと}せ^{おおいと}て、^{おおいと}皆^{おおいと}々^{おおいと}早^{おおいと}く^{おおいと}立^{おおいと}ち^{おおいと}た^{おおいと}ま^{おおいと}い^{おおいと}ね」と^{おおいと}気^{おおいと}を^{おおいと}も^{おおいと}た^{おおいと}せ^{おおいと}つ^{おおいと}つ^{おおいと}励^{おおいと}ま^{おおいと}せ^{おおいと}ば、^{おおいと}桜^{おおいと}戸^{おおいと}遂^{おおいと}に^{おおいと}得^{おおいと}耐^{おおいと}え^{おおいと}ず^{おおいと}して、^{おおいと}辺^{おおいと}りに^{おおいと}響^{おおいと}く^{おおいと}声^{おおいと}を^{おおいと}振^{おおいと}り^{おおいと}立^{おおいと}て、

「我^{おおいと}儕^{おおいと}一^{おおいと}人^{おおいと}の^{おおいと}心^{おおいと}に^{おおいと}て^{おおいと}留^{おおいと}める^{おおいと}事^{おおいと}の^{おおいと}な^{おおいと}ら^{おおいと}ず^{おおいと}と^{おおいと}も^{おおいと}義^{おおいと}を^{おおいと}見^{おおいと}て^{おおいと}せ^{おおいと}ぎ^{おおいと}る^{おおいと}は^{おおいと}勇^{おおいと}婦^{おおいと}に^{おおいと}非^{おおいと}ず。誰^{おおいと}に^{おおいと}も^{おおいと}あ^{おおいと}れ、^{おおいと}三^{おおいと}世^{おおいと}姫^{おおいと}に^{おおいと}不^{おおいと}義^{おおいと}の^{おおいと}心^{おおいと}を^{おおいと}抱^{おおいと}く^{おおいと}者^{おおいと}は^{おおいと}か^{おおいと}く^{おおいと}の^{おおいと}如^{おおいと}し」と^{おおいと}叫^{おおいと}び^{おおいと}も^{おおいと}あ^{おおいと}え^{おおいと}ず、^{おおいと}懐^{おおいと}剣^{おおいと}抜^{おおいと}いて、^{おおいと}白^{おおいと}金^{おおいと}の^{おおいと}台^{おおいと}を^{おおいと}微^{おおいと}塵^{おおいと}に^{おおいと}斬^{おおいと}り^{おおいと}碎^{おおいと}け^{おおいと}ば、^{おおいと}巨^{おおいと}綸^{おおいと}は^{おおいと}ま^{おおいと}ず^{おおいと}ま^{おおいと}ず^{おおいと}怒^{おおいと}り^{おおいと}猛^{おおいと}って、

「この^{おおいと}痴^{おおいと}れ^{おおいと}者^{おおいと}、^{おおいと}無^{おおいと}札^{おおいと}なり。そ^{おおいと}こ^{おおいと}な^{おおいと}退^{おおいと}き^{おおいと}ぞ」と^{おおいと}息^{おおいと}巻^{おおいと}き^{おおいと}猛^{おおいと}く^{おおいと}短^{おおいと}刀^{おおいと}引^{おおいと}き^{おおいと}抜^{おおいと}き^{おおいと}斬^{おおいと}ら^{おおいと}んと^{おおいと}す^{おおいと}る^{おおいと}を^{おおいと}「こ^{おおいと}こ^{おおいと}は^{おおいと}短^{おおいと}慮^{おおいと}ぞ」と^{おおいと}呉^{おおいと}竹^{おおいと}が^{おおいと}抱^{おおいと}き^{おおいと}止^{おおいと}めて^{おおいと}働^{おおいと}か^{おおいと}せ^{おおいと}ず、^{おおいと}事^{おおいと}い^{おおいと}で^{おおいと}来^{おおいと}ぬ^{おおいと}と^{おおいと}杣^{おおいと}木^{おおいと}、^{おおいと}真^{おおいと}弓^{おおいと}ら^{おおいと}朱^{おおいと}西^{おおいと}も^{おおいと}諸^{おおいと}共^{おおいと}に^{おおいと}身^{おおいと}を^{おおいと}起^{おおいと}こ^{おおいと}し^{おおいと}つ^{おおいと}つ^{おおいと}立^{おおいと}ち^{おおいと}騒^{おおいと}ぎ、^{おおいと}走^{おおいと}り^{おおいと}寄^{おおいと}ら^{おおいと}んと^{おおいと}す^{おおいと}る^{おおいと}程^{おおいと}に、^{おおいと}味^{おおいと}鴨^{おおいと}早^{おおいと}く^{おおいと}押^{おおいと}し^{おおいと}隔^{おおいと}て、^{おおいと}杣^{おおいと}木^{おおいと}を^{おおいと}矢^{おおいと}庭^{おおいと}に^{おおいと}抱^{おおいと}き^{おおいと}す^{おおいと}く^{おおいと}め、^{おおいと}二^{おおいと}網^{おおいと}と^{おおいと}五^{おおいと}井^{おおいと}は^{おおいと}真^{おおいと}弓^{おおいと}を^{おおいと}し^{おおいと}か^{おおいと}と^{おおいと}取^{おおいと}り^{おおいと}止^{おおいと}め、^{おおいと}七^{おおいと}曲^{おおいと}は^{おおいと}又^{おおいと}、^{おおいと}朱^{おおいと}西^{おおいと}に^{おおいと}取^{おおいと}り^{おおいと}す^{おおいと}が^{おおいと}り^{おおいと}押^{おおいと}し^{おおいと}隔^{おおいと}て^{おおいと}て、^{おおいと}上^{おおいと}辺^{おおいと}ば^{おおいと}か^{おおいと}り^{おおいと}は^{おおいと}宥^{おおいと}める^{おおいと}の^{おおいと}み。小^{おおいと}蝶^{おおいと}、^{おおいと}著^{おおいと}は^{おおいと}三^{おおいと}世^{おおいと}姫^{おおいと}を^{おおいと}守^{おおいと}護^{おおいと}して^{おおいと}辺^{おおいと}りに^{おおいと}眼^{おおいと}を^{おおいと}配^{おおいと}る。い^{おおいと}ず^{おおいと}れ^{おおいと}も^{おおいと}暇^{おおいと}無^{おおいと}かり^{おおいと}け^{おおいと}り。その^{おおいと}時^{おおいと}桜^{おおいと}戸^{おおいと}は^{おおいと}右^{おおいと}手^{おおいと}に^{おおいと}刃^{おおいと}を^{おおいと}取^{おおいと}り^{おおいと}直^{おおいと}し、^{おおいと}左^{おおいと}手^{おおいと}を^{おおいと}伸^{おおいと}ば^{おおいと}し^{おおいと}て^{おおいと}巨^{おおいと}綸^{おおいと}の^{おおいと}胸^{おおいと}逆^{おおいと}取^{おおいと}つて、^{おおいと}ぐ^{おおいと}と^{おおいと}引^{おおいと}き^{おおいと}付^{おおいと}け、

「大^{おおいと}義^{おおいと}に^{おおいと}疎^{おおいと}き^{おおいと}匹^{おおいと}婦^{おおいと}に^{おおいと}向^{おおいと}か^{おおいと}つて、^{おおいと}云^{おおいと}う^{おおいと}も^{おおいと}由^{おおいと}無^{おおいと}き^{おおいと}事^{おおいと}な^{おおいと}が^{おおいと}ら。汝^{おおいと}は^{おおいと}三^{おおいと}世^{おおいと}姫^{おおいと}の^{おおいと}御^{おおいと}為^{おおいと}に^{おおいと}力^{おおいと}を^{おおいと}尽^{おおいと}く^{おおいと}す^{おおいと}心^{おおいと}無^{おおいと}く、^{おおいと}返^{おおいと}つて^{おおいと}七^{おおいと}人^{おおいと}の^{おおいと}客^{おおいと}人^{おおいと}達^{おおいと}を^{おおいと}追^{おおいと}い^{おおいと}や^{おおいと}ら^{おおいと}んと^{おおいと}欲^{おおいと}せ^{おおいと}し^{おおいと}事^{おおいと}を^{おおいと}我^{おおいと}始^{おおいと}め^{おおいと}よ^{おおいと}り^{おおいと}よ^{おおいと}く^{おおいと}知^{おおいと}れ^{おおいと}り。あ^{おおいと}ま^{おおいと}つ^{おおいと}さ^{おおいと}え、^{おおいと}こ^{おおいと}の^{おおいと}人^{おおいと}々^{おおいと}が^{おおいと}容^{おおいと}易^{おおいと}く

げざん さんせひめ とりこ ななたり もくろみ りきし
下山せじと云えば、三世姫を虜にして、迫って七人を追わんと目論見、幕の陰に力士を隠して事の様子を窺わせる、昨夜よりの目論見を既に我は察したり。我れは義により此の砦を姫上に参らせて、汝を誅する者なり」と罵る程に、巨綸は撥ね返さんと身をもがき、「寄れや▼者共」と呼ばりたる声も得引かぬその隙に、桜戸は一声高くおめいて、閃かしたる切っ先に巨綸は喉より項へぐっさと貫かれ、アッと叫んでほとばしる血潮と共に仰け反って、そのまま息は絶えにける。

※麾下(きか):ある人の指揮下にあること。また、その者。部下。

ここに至って、小蝶、呉竹、七人ひとしく刃を引き抜き、
「この砦に在りと在る者、桜戸殿に従えば、後々までも幸いあらん。迷いを取って敵対なさば、可惜(惜しくも)※頭を失うべし。いかにいかに」と呼び張りたる勢いに吞まれたる杣木、真弓、朱西らは事叶わじと思ひけん。等しく地上にひれ伏して、降参をしたりける。この三人の勇婦すら、かくの如くの有様なれば、まいて巨綸に従うたる大将分なる兵らも皆おめおめと頭をのべ、
「姫上の御為に忠義を尽くし候わん。許させたまえ」とうち詫びて、幕の陰に隠れ居たる力士どもも刃を伏せて、なびき従わぬ者も無ければ、小蝶、呉竹は「さもこそ」とて、まず巨綸の亡骸をもたげ出させ葬らせ、向後の事を議せんとて、書院を祓い清めさせ、皆、車座に押し並び、まず此の砦の大将分の座席の次第を定めける。

※あたら(可惜):惜しいことに。もったいなくも。

けいせいすいこでん だいしへん きょくていばきん うたがわくにやす
傾城水滸伝 第四編ノ四 曲亭馬琴著 歌川国安画

その時、小蝶、呉竹は桜戸の手を取り、三世姫の方辺の第一の座に据えんとせしに、桜戸はいかでか従うべき。立ちも上がらず頭を打ち振り、
「此は思い掛けも無き。私は武芸を好みはべって、わずかに習い得たれども、能もあらず徳も無く、いかでか第一の座を汚すべき。多力の刀自はその儀その徳、誰かよくその右にいでん。姫上の補佐として第一の座にこそあらめ。いざさあさあ」と押し立てて、上座に上するを小蝶も否んで従わず、
「私は新たにここへ来ぬる落人の身にしあるに、元より学びの窓に疎くて、人の頭となる徳は無し。その儀はつやつや請け引き難し」と云うを桜戸聞きながら、
「十目の見るところ、御身の徳義は世に聞こえ男子も及び難しと云えるに、もしこの砦を管領して、一の人となりたまわずば、諸人の心は一致せず、姫上の御為に永くこの地を守り難けん。否みたまうは忠ならず、義に違えり」と説きすすめて、割無く上に居らすれば、小蝶は遂に否む由無く、第一の座に着きにけり。

その時、桜戸は呉竹の手を取って、第二の席に据えんとするを呉竹もまた従わず、只桜戸を押し進めて、

「まげてこの座に着きたまえ」と云えば桜戸は頭を打ち振り、
「智慧海の先生は▼思慮深くして謀り事あり。宜しく軍師と仰ぐべし。かかれれば多力の主に次いで、第二の座に着きたまうを誰が過ぎたりと、これを云わん。否むは要無き事ぞ」としきりにすすめて

押し据えつ、かくて又、桜戸は^{めどぎ} 箸をすすめて、呉竹の次の座に^お居らすれば、^{めどぎ} 箸は慌てて立ち^{しりぞ}退いて、

「呉竹の^{とじ}刀自はとまれかくまれ、^{わらわ}私がいかでか^{おんみ}御身を越えて第三の座に着くべきや。いざ虎尾主、さあさあ」としきりに譲って止まざりしを桜戸はなお聞かずして、

「^{けんたいじじょう}謙退辞讓（謙遜）※も事によるべし。^{めどぎ} 箸の主は風を祈り雲を起こして、鬼神を使う^{つうりきじさい}通力自在の^{ほうじゅつ}法術あり。かかれば今我が^{こぜい}小勢をもて、大敵に勝たん事、^{おんみ}御身に頼らず誰やはある。小蝶、呉竹二人の^と刀自と^じ鼎※の^{かなえ}足に異ならず。一方欠けてもはなはだ不可なり。枉げてこの座に着きたまえ」とて、第三の座に押し据えたり。

かくて又、桜戸はつらつらと見渡して、なお譲らんとすれば、小蝶、呉竹、^{めどぎ} 箸らは桜戸にうち向かい、

「我々三人は止む事を得ず、この上座に居る事は^{かなえ}鼎の足に例えたまう^{おんみ}御身の計らいによるもの、なおも座席を譲りたまえば、我々もまた末座に下らん。かくても譲りたまうや」と言葉ひとしく請いすすめるに、桜戸も争いかねて、第四の^{むしろ}席に着きにけり。その時小蝶、^{めどぎ} 箸らは^{そまき} 杣木、真弓を押し上して、桜戸の次の座に居らせんとしたれども、^{そまき} 杣木、^{あじさ} 真弓は後退りして腹の内に思う様、

「……我等は武芸も世の常にて、元よりさせる才も無し。いかにして、この人々に及ぶ事のあるべきや。徳薄くして高きに居れば、身は▼安からず、なかなか危うし。譲って下に居るこそ良けれ」と思案をしつつ従わねば、小蝶は遂に第五の座を^{あじかも} 味鴨と相定めて、第六の座は^{ふたあみ} 二網、第七は^{いつつい} 五井、第八は^{ななわた} 七曲、第九は^{そまき} 杣木、第十は^{あかにし} 真弓、第十一は^{あかにし} 朱西と、次第を追って、その座を定めつ、

「およそ此の十一人の^{ゆうふ} 勇婦どもは天地に誓い血をすすり、^{さんせひめ} 三世姫の^{おんため} 御為に義を結び忠を尽くさん。もしこの誓いに背く者は身を^{いかづち} 雷に撃たれて死なん。永劫浮かぶ瀬あるべからず」と誓い終わって酒宴を催し、味方に名ある^{つわもの} 兵らは更なり。^{ざっぴょう} 雑兵に至るまで、物を取らせて、酒を飲ませ、^{しょうばつ} 賞罰を正しくして、ちとの^{わたくし} 私も無かりしかば、^{しそつ} 士卒もひとしく喜んで、^{ひめうえ} 只姫上の^{おんため} 御為に命を捨てんと思わぬ者無く、勢い日頃に十倍せり。かくてその後小蝶、呉竹は^{めどぎ} 箸、桜戸らと^{あいはか} 相謀り、^{ぶぐ} 武具を蓄え船を作らし、をさをさ討つ手の大群を防ぐ手立てを巡らす用意に暇なかりけり。

※謙退（けんたい）：控え目に振る舞う・こと（さま）。謙遜。 ※辞讓（じじょう）：へりくだって他人に譲ること。

※鼎（かなえ）：古代中国の煮炊き用の器の一。一般に円形で三足、また長方形で四足。

かかりし程に^{ぐんりょうしげかど} 播磨の^{ふたあみ} 郡領重門は先に^{つか} 唐崎の^{とらえもん} 二網らを絡めよとて、^{とらえもん} 遣わしたる^{とらえもん} 虎右衛門は打ち負けて、二百余人の^{ぐんびょう} 軍兵を残り少なに打ち滅ぼされ、あまつさえ^{とらえもん} 虎右衛門は左右の耳を削ぎ取られ、ようやく逃げ帰りしかば、且つ驚き、且つ呆れて、なお又、小蝶ら七人の行方を探り求めるに、小蝶らは近江の^{しず} 賤が^{たけ} 岳の^{とりで} 砦に籠もって、をさをさ討つ手を防がんと欲する由、^{ふうぶん} 風聞隠れ無かりしかば、そは安からぬ事なりとて、此の度は^{ようたずぶろくろうさめたか} 要田頭歩六郎^{ろうとう} 鮫高と云う^{ぐんびょう} 郎党に軍兵三百余人を授け、なお又、近江の佐々木家には二百余騎の加勢を請わしつ、その勢全て五百余騎、さあ小蝶らを討ち捕れとて、^{こすい} 湖水を指して^{つか} ぞ遣わしける。

かくて^{ようたずぶろくろう} 要田頭歩六郎^{おうみ} は近江に至って^{ぐんぎ} 軍議を凝らし、^{しず} 賤が^{たけ} 岳の^{くが} 地理を思うに、東北の方は陸に続けども^{みのえらぜん} 美濃越前の^{かいづ} 街道にて、その道遠く難事に多かり。かかれば^{おおうら} 貝津、大浦の磯辺より、船を浮かべて^{ちくぶしま} 竹生嶋の^{いいうら} 西北より^{やまし} 押し渡り、^{しず} 飯浦、^{たけ} 山梨へ押し寄せて、^{あまた} 賤が^{あまた} 岳へ向かうべしとて、^{ごじん} 数多の大船を借りもよおし、佐々木家より^{ぐんびょう} 加勢の^{あまた} 軍兵が打ち乗ったる^{ごじん} 数多の大船を後陣と定め、その身は真っ先

に押し渡って、攻め潰さんとぞ勇みける。

賤が岳にもこれらの由、予て遠見の雑兵が早く注進▼したりしかば、小蝶は十人の勇婦らを衆議廳へうち集い、戦評定(軍議)※まちまちなり。

その時呉竹が進み出て、

「我儕、既に謀り事あり。二網、五井、七曲の姉妹は敵の先手にうち向かい、斯様斯様に計らいたまえ。杣木、真弓の両人は葦葦の繁みに埋伏して、斯様斯様に為したまえ。又、桜戸、味鴨の両勇婦は敵の後陣を襲い討ち、斯様斯様にしたまえ」とて謀り事を説き示し、各々百人余りの軍兵を授けにければ、皆喜んでうち立ちけり。

さる程に要田頭歩六郎鮫高は百艘余りの戦船の真っ先に進みつつ、既にして向かいの岸に程遠からずなる時に、大歳麻二網は一艘の早船に只一人うち乗って、雑兵五人に艀を押させ、進み近づくと頭歩六の船に向かって声高やかに、

「汝ら先度に懲りずして、深入りして後悔すな。大歳麻二網の手並みを見ずや」と罵れば、頭歩六怒ってちっとも疑義せず、矢庭に船を乗り付けて、討たんとするを二網は戦いながら艀を反して、葦の繁みにしりぞをなお逃さしと追っかけたり。かかる所に五井が乗ったる早船、これもまた艀を押す雑兵は五人に過ぎず、頭歩六を遮り留めて、しばらく挑み戦いつつ、たちまちにうち負け船を返して逃げ走れば、又、入れ替わる七曲の船も雑兵五人に過ぎず、迎え進んで戦うものから、たちまち船を巡らして、水際を指して逃げて行くを「きたなし返せ」と頭歩六は船をしきりに早める折から、水際の葦の内よりして、鬨をどっと作りつつ、杣木、真弓の手の軍兵、その船およそ四五十艘。矢を射る如く漕ぎ出て、どっとおめいて頭歩六の船を真中に取り込めて、おめき叫んで戦うたり。

ここに至って二網、五井、七曲の早船も漕ぎ戻し、進み来たって、後なる敵の船どもを掛け隔て、よたり四人ひとしく揉んだりければ、さしもの大軍も度を失って討たれる者は少なからず、総敗軍となりしかば、頭歩六は辛くして早船に乗り換えて、逃れ去らんとする程に、味方の雑兵が小船を飛ばして頭歩六に告げる様、

「さて後陣より進みたる味方は思い掛け無くも、桜戸、味鴨の二手の戦に前後より▼不意を討たれて、佐々木家の総頭はたちまちに討たれしかば、味方の船ども乱れ騒いで、一支えも得支えず、水練を得たる者が矢庭に水中へ飛び入って、逃れる者もありしかど、多くは討たれ生け捕られ、助かる者はいと稀なり。それがしはこれらの由を告げ申さんと思いつつ、辛うじて小船にうち乗り、逃れて走らし参りにき」と告げるに頭歩六いよいよ慌てて、逃れ去らんとする程に、五井が船追っかけて来て、既に早や近づいたり。

頭歩六これを見返って、逃れ難しと思ひけん。たちまち入水してけるを五井すかさず熊手をもって頭歩六を引き上げて、生け捕りにぞしたりける。

○さる程に小蝶、呉竹と諸共と戦の勝負はいかにいかにと、その注進(報告)を待つ程に、二網、五井、七曲、杣木、真弓らは思いのままに勝ち戦して、大将要田頭歩六を生け捕って引き連れて来つ。又、桜戸、味鴨らは敵の後陣を討ち滅ぼして、船を取る事六十余艘、生け捕りたる雑兵は二百余人に及びしかば、勇み進んで凱陣せり。小蝶はこれを労って、頭歩六を牢屋に繋がせ、倉を

開いて士卒を賑わし、酒宴を開いて、勝ち戦の壽ぎを為せしかば、皆々歌い楽しんで、万々歳とぞ祝しける。

これより先に朱西は菅野浦に立ち帰り、始めの如く酒店に居り、この日早船をもて賊の砦へ注進する様、

「さても佐々木家の評定役は未だ敗軍を知らずやありけん。今宵、貝津、大浦の陣中へ兵糧を贈るとて、或いは車に積み上し、又は小荷駄に付けなどして、早や近づきぬ」と告げしかば、小蝶はこれを聞きながら、「誰か我が為に馳せ向かい、敵の兵糧を奪うべき」と云う言葉未だ終わらず、二網、五井、七曲らの三人がひとしく進み出て、「共に行かん」と請い願えば、小蝶はこれを見返って、「御身姉妹が行く時は大功を立てん事、今宵の内にあらんのみ。しかれども血氣に逸って必ず人を害すべからず。逃げる者をば追い捨てて、只兵糧を取るこそよけれ。心得たまえ」と戒めて、軍兵三百人を授けしかば、二網ら三人は欣然（喜んで）※として言承け（返答）しつつ、揉みに揉んでぞ急ぎける。

小蝶はなおも二網らの過あらん事を恐れて、又、味鴨を呼び近づけ、「御身も今より追いつき、二網らに力を合わせて、分捕り功名成したまえ」とて、軍兵百人を授けにければ、味鴨は一議に及ばず、「承りぬ」と答えつつ、ひらりと馬にうち乗って同じ道へぞ馳せ去りける。

※欣然（きんぜん）：よろこぶさま。楽しげに事をするさま。 ※言承け（ことうけ）：受け答え。返辞。返答。うけあい。

○かくて二網、五井、七曲らは難無く敵を追い走らせて、兵糧六百俵を分捕って、味鴨もまた敵を襲って軍用金三千両を奪い盗り、その明け方に戦を収めて、小蝶にかくと告げしかば、小蝶は深く喜んで、二網姉妹、味鴨を賞すること大方ならず。その金を半ば散らして、味方の士卒にこれを取らせ、▼物惜しみすること無ければ、猛卒いよいよ付き従って、賽博士巨綸が頭領たりし時に似ず、勢い都鄙※に聞こえしかば、世の人をささ小蝶を称えて、夜叉天王とこれを称え、賊の砦を呼び換えて江鎮泊とぞ名付けける。

※都鄙（とひ）：みやこと田舎。都会と田舎。

事の心は近江の賊の泊と云う義にて、唐国の梁山泊を思い寄せたる技なるべし。これよりして江鎮泊には重ねて討つ手の沙汰も無く、各々無事に日を送りぬ。その中に桜戸は一人つらつら思う様、

「・・・我身がこの山に逃れ来しより、早や年月を経たれども、都の便りを聞くに由無し。いかで使いを遣わして、夫の安否を問えばや」とて小蝶にかくと告げしかば。小蝶はこれを聞きながら、「さあさあ使いを遣わしたまえ」と云うに桜戸喜んで、心腹の下部に事の心をよく得さし、密かに都へ遣わせしに、十日余りを経る程に、その下部が都より帰り来て、

「さても都の御宿所を密かに訪ね候いしに、彼の後も軟清様を彼の亀菊がしばしば招いて、本意を遂げんとせられしかども軟清様は従いたまわず、病の床にうち臥して、この春の頃、身罷りたまひぬ。只、彼の小者錦次のみ、都の内に小店を持って、かすかなる世を渡るのみ」と告げるに、桜戸は胸潰れ、やるかたも無き嘆きをせしが、これより愛惜の思いを絶って、只姫上の御為に命を捨てんと念ずるのみ。また他事は無かりけり。

都の便り既に聞こえて、桜戸の夫軟清が世を去りし事の趣を小蝶、呉竹、蕃らは更なり、皆哀

れまざる者も無く、只、亀菊けがの穢たんそくれたる行いを憎むのみで、ひとしく嘆息したりける。その時桜戸は小蝶らにうち向かって、

「私わらわは此の山に身を寄せしより、都へ便りをせま欲しく思わざりしにあらねども、巨綸おおいとの心こころ様は頼もし気無きものなれば、その事をしも告げかねて、今まで仇に過ぐせしなり。されば我が夫あだ軟清すが世にある程に訪れず、残り惜しさも一入ひとしおなれども老少不定ろうしょうふじょう※は世の習い、今更くやむは愚かなるべし。これに付いても大恩人の節柴殿へは道遠くて、未だ報いをせざるこそ、本意無き事にはべるかし」と云うに小蝶も慰めかねて、又、云う由も無かりしをたちまち心付く事あって、呉竹めどぎ、箸あじかも、味鴨あじかも、二網姉妹ふたあみを招き寄せつつ、さて云う様、

「我々七人必死を逃れて、今この砦とりでに立て籠もり、三世姫さんせひめを安らかに守り奉る幸いは先に危急を告げられたる大箱の情けにて。かつ我々を見逃がせし、稲妻、朱良井二人の勇婦の助けによれるものなるに、恩を受けて報いをせずば、鳥獸とりけだものにも劣るべし。しかれども難波まで、此の使いを遣わす事、容易かるべき技にあらず、誰か忍んで難波へ赴き、我が為に大箱の刀自にこの儀を伝うべき」と云う言葉、未だ終わらず、味鴨あじかもは早く進み出て、

「私わらわがその使いに立ちてん。さあ消息しょうそく（手紙）をしたためたまえ」と云うに小蝶はうち案じて、「御身が難波へ行かんと云うを悪しと思うて止めるにあらねど、彼処は私の故郷にて、人も良く知る敵地なり。漫ろに逸って過ちあれば、彼の恩人を巻き添えせん。しからば恩に應えるに、仇をもてするに似たり」と云うを味鴨聞きながら、

「そは心得てはべるかし。私は▼人々にいや増して、姫上の御為には譜第相恩ひめうえ おんため ふだいそうおん※の者にはべれば、人のし難き事をしも命に掛けて成さん事、これ元よりの願いなり。その儀は心安かれ」とて、しきりに請うて止まざりしを小蝶はなおも戒めて、遂に一通の消息を書きしたため、金三百両を相添えて、これを味鴨に渡して云う様、

「この金百両は大箱に贈るべし。又、百両は二つに分けて、稲妻、朱良井に贈らんと欲す。残る百両は天野の判官遠光の老臣人らに分ち贈って、白粉を救い出すべき手立てを巡らしたまえかし。しかれどもこれらの事は皆、春雨の刀自に頼んで、三百両も此のままに彼の人に渡したまえ。忘れてもよく用心して、人にな知られたまいぞ」と返す返すも戒めて、路用も多く取らせしかば、味鴨あじかもは一議に及ばず、旅装いを整えて密かに難波へ赴きけり。

※老少不定（ろうしょうふじょう）：人の命は予測しがたく、年齢の大小に関わりないこと。

※譜第（ふだい）：①何代も家系が継がれている。②代々、同じ主君に仕えている。③譜代大名。

※相恩（そうおん）：代々恩を受けていること。

〈これ□前の半丁の絵の訳を解く〉

さる程に播磨の郡領はりま ぐんりょう※重門は賤が岳へ向かわしたる軍兵多く討ち取られ、あまつさえその手の大将しょうた要田頭歩六郎ようたずぶろく鮫高が敵の為に生け捕られし由、敗軍の後に雑兵が僅かに逃れ帰りつつ、かくと注進したりしかば、重門はひどく驚き騒いで、手の舞い足の踏む所を知らず、かかれれば又、鎌倉よりいかなる咎めがあるべきとて安き心も無かりしに、果たして鎌倉よりみぎょうしよ御行書が到来し、所領の国郡を換えるべき由、既にその御沙汰あり。重門の領分を新判官の成国に当て行われ、重門は陸奥の信夫郡を領すべしとて、成国が入部してければ重門は辞するに由無く、城を成国に引き渡し、且つ賤が岳の女武者らの事の趣を告げ知らせ、その身は従類を相具して陸奥へぞ下りける。

されば新判官の成国は賤が岳の小蝶らの武勇の体たらくを伝え聞き、心の内は安からず。もし彼の勇婦らが船路よりここへも逆寄せすべきかとして、用心の他事も無く、津の国、丹波、備前、備中の大小名へ思う由を告げ知らせ、事あらん時は助けの勢をいだされるべしとぞ触れたりける。

○これにより、成国より謀じ合わせる廻らし文(回覧文)が難波へも到来せしかば、天野の判官はこれを見て、「これらの書面を写し置け」とて、物書き部屋へぞ出されける。この日、春雨の大箱はその身当番なりければ、その廻らし文を開き見て、密かに驚き思う様、

「……いかなれば、小蝶らは由無き謀反を企てて、一度ならず再び三度、討つ手の兵を防ぎ止め、皆殺しにしたるぞや。もし重ねて鎌倉より大軍をもて攻められれば、その身その身の命は更なり。遂に彼の三世姫さえ、いかでか逃れたまうべき。由無き事をしつるかな」と思う心を云えばえに、云わで苦しむ胸にのみ、別れし後も友だちを思うは人の真なり。さる程に大箱はこの日我が為すべき業がなお生憎に多かりければ、年頃、我が下役なりける走書の安蛇子と云う女物書きにこれよく写し留めよとて、▼廻らし文を渡しにければ、安蛇子はやがて受け取って、かたの如くに写しけり。

されば大箱は女子なれども親の役義を受け継いで、物書き事を務めとすれば、主の遠光もこれが為に下役の筆取りすら男をば付けられず、よく手を書く女子を選んで、彼女が助けにせられたり。

○かくて又、大箱はこの日の務めを成し果てて、退き出て宿所に帰るに、その道にして行抜のお裡と呼ばれる姫に会いけり。彼女は男女の奉公人の口入れとか云う事を世渡りにする者にして、大箱の宿所にて奉公人を求める毎に出入りをする者なりければ、予てより相知れり。その時、お裡は大箱を遙かに見つつ、後に立たせし一人の婆を見返って、囁きながら大箱の辺近く走り近づき、「此は宋公明村の御書役様。只今御退きあそばしまするか。ちと御願いの筋あって、この婆殿を伴いつつ御宿所へとて出掛けしに、ここにてお目に掛かりしかば、途中でははべれども、あからさまにお話し申さん。そもそもこのお人は私と年頃相店にて、虎魚となん呼ばればべる。悪き人ではなけれどもうち続く不仕合せにて、只一人子の義太吉は春の頃よりぶらぶら病。薬の代に質草も置き尽くしたる丹精(誠心誠意)※にて、義太吉若衆は後の月よりようやくに肥立ち※しが、立ちも替わって、その夫の閻八殿は卒中にて、病み患う事、只一日、昨夜ころりと逝かれたり。

されば久しう無商売にて、煎じ詰めたる拳句の果てに不幸に会いし事なれば、早桶一つ買う由も無く、なおかつお寺へ四十九日の仕切りなんどの手当てもあらず。いかにせましと談合を掛けられてはうちも置かれず、我身も一昨年の大病の折には此の夫婦の衆の世話になりたる恩もあれば、ともかくもして間を合わせ、野辺送りをして進ぜたいと思うに甲斐無きその日暮らしの力には及び難し。あなた様は此の年頃、萬の上に慈悲深く、疎き親しき隔て無く人の落ち目を救わせたまうを予てより聞きもしつ見もせし事のはべるから、御合力を願い申せば否と宣う事あらじ。我儕と共にお宿所へ参りたまえと力を付けて、かくは同道しはべりぬ」と告げれば、後なる閻八婆の虎魚は涙を拭い、「お慈悲を願い奉る。お慈悲、お慈悲」とばかりに手底擦って拝みけり。

大箱これを聞きながら、

「そは不憫なる事ぞかし。棺の値はいかばかりぞ。御寺への布施は幾何ぞ」と問われて虎魚は頭

をもたげ、錢二三貫あれば早桶も買えるべく、御寺へ仕切りもそれにて足りなん。さばかり願ひ奉
る」と云うに大箱 領いて、懐 にしたりける筈迫の紙入れより小判三両を取り出して、

「亡き人を葬るともその日よりして親子の者が飢えに臨まば、その甲斐無からん。よってこの金を
遣わすなり。初七日には茶でも煎じて、世話になりたる相店の人々にも振る舞うべく、残れる金は義
太吉とやらの元手にさせて取り付けかし。心得たるや」と説き諭して、その金を取らせにければ、閻
八婆は夢かとばかりに驚きつつ喜びに耐えぬばかりに戴いて、

「海女が鹽焼く辛き世にかく数多のお金をしも恵ませたまう人あらんや。来世は牛とも馬とも生ま
れて、御恩を報じ奉らん。あら有り難や、尊うとや」と喜び涙にかき暮れば、お裡も共に繰り
返し、その喜びを述べしかば、大箱は聞きながら、

「さばかりの事、何かあらん。さあさあ帰って野辺送りの用意をせずや」と急がして別れて家路に
急ぎけり。▼

※丹精：①心をこめて物事をする事。②まことの心。真心。丹心。赤心。 ※肥立ち（ひだち）：日に日に回復（成長）すること

されば又、虎魚婆の夫閻八は年頃、操り芝居なる道具だてを取り立てるを生業とせし者なりけれ
ば、一子義太吉を浄瑠璃語りの太夫にせんとして、幼き頃よりこれを習わせ、今年は十八ばかりにな
りぬ。元より顔形麗しく、よしや歌舞伎の色子と云うとも劣るまじき少年なれば、この所の日まち
彼処の酒宴などとして、折々招かれる座敷もあれば、世渡りになりぬべく思いたりしに、うち続く
不仕合わせにて衣装は更なり、三味線すらこと如く質物に置き尽くしたる事なれば、さる技も心に
任せず、ほとほと困じ果てたる折、思い掛け無く大箱に金三両を恵まれて、亡き親の野辺送りを執
り行ないしのみならず、式両余り残りしかば、義太吉の身の皮（衣類）を質屋より受け戻して、座敷
やあると待ちけれども、その後は何処よりも招く得意の無かりしかば、受け戻したる衣もまた質に
置きつつ、ようやくに細き煙りを立てたりける。

これより先に虎魚婆は夫閻八が亡き後の日柄も既に果てし頃、大箱の宿所へ赴いて、先に受け
たる大恩の喜びを述べて帰りつつ、腹の内に目論見あれば、大箱には夫無き事、且つ、出頭して務
める事まで、そのお裡に落ち無く聞いてつくづくと思う様、

「……彼の女中は年頃なるに、なお身一つにて暮らしたまえば、よしや物堅き性なりとも折
節は男欲しく思いたまわぬ事あるや。義太吉を囹にして、あの女中を引き入れれば、為になるこ
と多かるべく、その他に又、客も付くべし」さわとてやがて思う由を我が子に囁き心を得させ、再
び大箱の宿所に至って、安否を尋ねる事のついでに我が子義太吉の事を云いいで、

「彼はをさをさ浄瑠璃の弾き語りを良くしはべれば、稽古所を建てさせんとて、近頃札を掛けたれ
ども年若ければ見落とされてや、未だはかばかしく弟子も得つかず。いとはばかりなる事ながら、
あなた様が折々来まして語らせて聞きたまわれば、幾十人の聞き手に増して、世の人も落とすめず、
弟子の付く事早かるべし。御慈悲深き御心にて、我々親子を助けると思し召して、御いであればい
よいよ御恩は忘れじ」とて、かき口説きつつ頼みけり。

大箱は遊芸の浮いたる技を好まねば、あらずもがなと思うものながら、かくまでに云われるを行
かじとは答えかねて、その後、暇ある折に虎魚の宿所へ赴きければ、親子は槌にて塵掃くまでに

喜び敬うこと大方ならず、酒肴を買い整えて大箱を厚くもてなし候。義太吉は一二段浄瑠璃の弾き語りして大箱を慰めけり。これにより大箱は金一分を親子に取らせて、早く家路に帰りしが、又、その後も虎魚婆はしばしば人を遣わして、大箱を招くになん。三度に一度は否みかねたる大箱は我が一人行かんは後ろめたしと思ひて、此の度は我が下役の走書の安蛇子を誘って、虎魚の宿所へ赴きけり。

かかる事も既にして両三度に及ぶ程に、安蛇子はその性浮気にて、大箱より年も若く顔容もたち優って、いと婀娜めきたる女子なれば、密かに義太吉に懸想して、目使いにて知らせけり。

義太吉も始めの程は密かに大箱に情を寄せ、語らい寄らんとしたれども、大箱は行儀正しく、いつも浮きたる気色無ければ、かかる事にはいち早き義太吉なれど、詮術無くて只いたずらにうち過ぎたるに、安蛇子が我に心ある目使いにうちも置かれず、大箱が手水に立ったる暇をうかがい、契り初めて、水も▼漏らさぬ仲とぞなりぬ。

これより安蛇子は大箱に隠れて義太吉の宿所に赴き、会う事の度重なるままに、辺りの人も良く知って大箱をすら誇り嘲り、「その女中は物堅き日頃の気質に似気も無く、義太吉の浄瑠璃の花張りとなるのみならず、安蛇子の為に金を費やす、うたてさよ」と云いけるを大箱の耳には入らねど、既に安蛇子と義太吉が訳ある事を推せしかば、心の内に爪弾きして、その後は虎魚婆が向かいの人を遣わしても事にかこ付け行かざりけり。

○さる程に大箱はある日、城中より退き出て宿所へ帰る途中にて、一人の旅する者とおぼしき田舎娘に行き会いけり。彼女はしきりに我を見返り、我もまた何となく見たる人かと思へども、さすがに思ひだされず。その女子は行きもやらず、取って返しつ後に付き、我行く方に來たれども我には事問う事も無し。その女子は思ひかねてや方辺の髪結い所に立ち寄って、

「今彼處へ行く女中は難波の書役とその名聞えし大箱殿にあらずや」と問えば、「さなり」と答えけり。その時その田舎娘は忙わしく大箱に走り近づき、小腰をかがめて、

「春雨の刀自、卒爾ながら密かに申すべき事こそはべれ。便宜の所へ立ち寄せたまえかし」と呼び掛けられて、大箱はなお心を得ず、眉根をひそめて、つらつら見て、

「何人に御座するにや。私は忘れて思ひ出ださず、さばれ用事あれば聞かざらんや。此方へ來ませ」と先に立ち、相知る仕出し酒屋に立ち寄って、ちとの酒肴をいませとて、やがて二階に上りしに、他には客も無かりけり。その時その田舎娘は大箱にうち向かって、「恩人つつがましまさずや」と云いつつ三拝したりしかば、大箱は驚き助け起こして、

「私は実に見忘れて。そもそも御身は何人ぞや」と問われて、ようやく頭をもたげ、

「先には危急の折に臨みて、卒爾に面を合わせしかば、見忘れたまうも理なり。私は赤頭の味鴨なり。再生の恩に報わん為に、小蝶殿の使いに立って、賤の砦より來たるなり。小蝶殿の口上は斯様斯様」とつぶさに述べて、一通の消息(手紙)と三百両の金を出して、辺近く差し寄せれば、大箱は封押し開いて、その文を見て、金を取らず、さて云う様、

「昔の契りを忘れたまわで遙々と訪われし事は喜ばしくはべれども、そなたの輩は肝太くもこの地に往來せられん事は薪木を抱いて火に近づくより、なおも危うき業ならずや。この後は忘れても必ずな來たまひそ。贈られし此の金はいささかなりとも受け難し。又、稻妻、朱良井へ贈らんとある一包みも取り次ぎしては届け難し。稻妻は心様の潔白なる女子なれば、贈るとも▼受けず、又、

朱良井は酒を好み。さるを此の金を得て酒を過ぐせば、災いの端とやらん。かかればその二人にも贈らぬに増すこと無し。折もあれば、私が方より小蝶殿の浅からぬ志をば伝うべし。金は此のまま持ち帰り、かく云う由を告げたまえ」と懇ろに説き諭して、否むを味鴨は押し返し、言葉を尽くしてすすめれども大箱は遂に受けず、

「御身が帰って小蝶の刀自へ云い訳無しと思いたまえば、私が今日の当たりに返事を書いて参らせん。そをもて帰って見せたまえば、小蝶殿がいかにして御身を叱りたまうべき」さはとて矢立※を抜き出して、文さやさやと書き終わり、封じて味鴨に渡して云う様、

「繰り返しても返しても同じ事にははべれども、御身は夜すがら道を急いで、この地に一夜も泊まりたまうな。白粉夫婦は始めの如く、今も牢屋に繋がれて、なお命にはつつがなけれど、千々の財を費やすとも容易く救えるべきものならず。云うべき事は多かれど、人に聞かれる事の惜しくて、つぶさには尽くし難し。春にもならば、我が妹を密かに砦へ遣わしてん。心得てたまえ」と囁きたる。道理なれば、味鴨は重ねて返す言葉無く、金を懐へ納めつつ、別れを告げてぞ立ちいづる。

頃は八月の半ばにて、日は早や暮れて隈も無き、月を明かしに味鴨は早く難波を離れんとて、しきりに道を急ぎけり。さる程に大箱は静かに酒屋を立ち出て、行く事未だ幾ばくならず、たちまち後辺に人あって、「御書役様、待たせたまえ」と呼びつつ袂を引く者あり。この人はこれ何者ぞ。上にいだせし絵を見て知るべし。

※矢立（やたて）：筆と墨壺を組み合わせた携帯用筆記用具。

作者曰く これより末は水滸伝の妙宋江閻婆惜の段にかかれり。丁数全て定めあれば、これを四編の終わりとして第五編に著すべし。五編も今年を引き続いて、程無く出版致すなり。巻を開いて佳境に入るべし。

<翻刻、校訂、翻訳：滝本慶三 禁転載 底本／早稲田大学図書館所蔵資料>